

「学びの共同体」としてのコミュニティ組織化

——テキサス産業地域事業団（IAF）を中心として——

河 田 潤 一

一 はじめに

産業地域事業団（IAF）は、米国シカゴの工業地域に住む貧しい民衆を組織化するために、ソール・アリンスキー（一九〇九—一九七二）らが一九三九年に結成したバック・オブ・ザ・ヤーズ近隣地区会議（BYNC）を発展的に継承する形で、一九四〇年に創設された^①。IAFは、工場街の地域社会において、教会や労働組合の指導者を中心に民衆の組織化を推し進め、産業都市に民主的な生活様式を根づかせることを目指した。

BYNCを中心に活動してきたアリンスキーは、IAF組織の一つとしてサウスサイドのウッドローン地区に、一九六〇年にウッドローン・オーガニゼーション（TWO）を結成した。同組織は、黒人低所得者地域で公立小学校二校に対する地元統制に取り組んだ。しかし、彼らの言を軽視する教員らに転勤を求めたことが教育専門職体制の反発を買ったこともあり、組織は二年余りで行き詰った^②。しかし、TWOは、黒人の間における最も重要

な社会的試み、特に学校改革問題への取り組みは、人種問題への対応の一つのあり方として注目された。

TWOの評判を受け、IAFは、シカゴ以外にもカンザスシティ（ミズーリ州）、ロチェスター（ニューヨーク州）、バッファロー（ニューヨーク州）の黒人地区に、それぞれ統一行動協会（CUA）、FIGHT（Freedom, Integration, God, Honor, Today）、BUILD（Build Unity, Independence, Liberty, and Dignity）を設立した。⁽³⁾

アリンスキーは、一九七二年に心臓麻痺で死去する。彼は、民衆組織化の運動が直面する困難を前にし、組織は、「地域を基盤とするだけでは限界があり、全国的なパワーを必要とする」との認識を有していた。⁽⁴⁾しかしながら、TWOやFIGHTは、地元組織、特に教会指導者への依存から十分に脱し切れなかった。TWOは、学校改善プロジェクト費用の調達などで教育委員会やシカゴ大学と連携するなかで、結局は草の根参加的な性格を失うことになった。⁽⁵⁾またFIGHTは、経済開発と行政運営の一端を担ったが、一九七〇年代初めに内紛で瓦解した。これら二つの組織が短命であった理由の一端は、狭い地理的範囲での組織外勢力への依存が、アリンスキーの都市ポピュリスト的活動スタイルに地元偏狭的、教区的で民族主義的な性質を帯びさせたことにあつた。⁽⁶⁾

本稿が主たる対象とする米南西部・テキサスIAFは、テキサス州内に十一の傘下組織を有し、特にエルネスト・コルテス（一九四三）の指導によって活動幅を広げた。コルテスらは、州大に広がる刷新的な労働訓練雇用プログラムであるネットワークQUEST（Quality Employment through Skills Training、一九九二年に設立された技術訓練による良質な雇用プロジェクト。一九九五年にハーバード大学からInnovation in American Government Awardを受賞）や一〇〇以上の学校が参加する学校改革モデルである提携学校（AS）教育イニシアティブなどを創設し、テキサスIAFは、「進歩的コミュニティにおける宗教関与とインナーシティでの政治

的組織化」のモデルとしての評判を高めた。⁽⁷⁾

本稿は、テキサス I A F、なかんずくサンアントニオ市を中心に活動を展開してきた公共サービス推進コミュニティ協会 (Communities Organized for Public Service : C O P S) を「信仰に基づく組織化」のザ・モデルとして検討し、その奏功の要因を「学びの共同体」が生み出す民衆の市民的能力の育ちと、近隣社会・教会・家族などの社会基盤の編み直しの上に展開される政治的エンパワメントの側面にも光を当て、地域における「哲学する市民」による「自発する民主主義」創出の条件を考察しようとするものである。

一 テキサス I A F とコミュニティ組織化の社会基盤

(一) テキサス I A F の展開

(1) アリンスキー以後の I A F

「コミュニティ組織化の容赦なきヒーロー」⁽⁸⁾と評された I A F 全国ディレクターのエドワーズ・チェンバース (一九三〇—二〇一五) にとって、一九六〇年代の激しい社会運動は、アメリカ国民の「穏健派と保守派を惹きつける」ことが難しく、国民の大半にとってもそれは、「単一争点の実現だけを目指し、アメリカの多様な伝統を踏みにじるもの」⁽⁹⁾と映った。そのチェンバースは、社会運動と組織の違いを次のように認識している。

運動は、カリスマ的リーダー、他人のお金、無差別な人の補充、素人の献身、「靈感、イメージ、意識高揚」に頼ろうとする。組織 (コミュニティ組織) は、会費、集団指導、軍隊のような規則正しさ、体系的な日課、プロ意識、勝つために活動することの上に作られる。運動は、イデオロギー的である。アリンスキー的な組織

モデルでは、人々は自己利益の実現を求めて民主的に動く。イデオロギーは関係ない。⁽¹⁰⁾

チェンバースはこのように考えるも、アリンスキー的な組織化手法や使用言説が、一九七〇年代以降の社会・経済状況が貧困層を襲うと予想される新たな緊張やストレスに対応しようとは考えていなかった。一九六〇年代の激しいイデオロギー対立の時代、アリンスキーにとっての「政治」は、「善を成すこと (doing good)」でも「正しくあること (being right)」でもなかった。先に見たように彼は、未組織の民衆の自己利益を「不満の古傷を擦りむけるほどこする」がごとく忍耐強く組織化を行い、政治に圧力をかけることであった。しかし、こうした「政治」観は、短期的な運動・キャンペーンにとつては有効であったとしても、中長期的な組織の維持といった点からは問題が多かった。⁽¹¹⁾

チェンバースは、こうしたアリンスキーの限界を、組織化のエネルギーを家族や近隣教会といった社会基盤から引き出す民衆組織を創出することで克服しようとした。民衆の市民的参加を、家族といった「私的」領域と宗教を実践的に結びつけるというチェンバースの考えは、一九七八年三月に公表された『家族と会衆のための組織化』に要約的に表現されている。IAFのオーガナイザー、リーダーの研修手引書となったこの文書は、「宗教的価値と自己利益志向の政治活動の結合」、「聖書」が示す「力と愛の精神、自己抑制」を強調しており、「孤独の中では家族と会衆は何の力も機会も持ちえない」と、コミュニティの組織化の必要性を訴えている。

こうした新たな「組織化の神学」は、人種や階級、ジェンダーの差異にこだわる「アイデンティティ・ポリティックス」とは異なり、リアルな経済的危機の中で苦闘する家族や若者の基本的な生きるという権利を確保するためにも、アメリカ人の社会的・精神的生活を豊かにしてきた中間共同体に光を当てようとするものであった。

新生 IAF は、こうした考えの上に中間共同体としての組織をできるだけ幅広く、長期にわたって維持させようという点からいくつかの工夫を図った。中央は、地方支部と一定の契約を結び、地方と IAF のオーガナイザーの關係の互酬化を図り、財政的にも健全さを維持することが目指された。中央と地方のこうした關係は、IAF の幅広の原則を地方支部が守るという安心感をオーガナイザーに与えた。こうして、「より大きな IAF ネットワークに關係しているオーガナイザーが継続的な影響を与えることによって、地元リーダーの展望を広げ、行動への能力を増大」⁽¹²⁾させ、アリンスキーの組織論的な限界を克服しようとしたのであった。

(2) 公共サービス推進コミュニティ協会 (COPS)

公共サービス推進コミュニティ協会 (COPS) とは、アリンスキーの死後、エルネスト・コルテスを中心にテキサス州サンアントニオで創設された米南西部・テキサス IAF を代表する組織である。南西部は、ニューメキシコ、アリゾナ、テキサス、コロラド、カリフォルニアの五州から成るとされるが、この地域の大半の市や町には大小のバリオ (Barrio: 「小さなメキシコ」⁽¹³⁾とも呼ばれる neighborhood のこと) が点在している。特にテキサス州にはメキシコ系アメリカ人、ヒスパニックが今に至るまで数多く住んでいる。

コルテスは、一九六六年にサンアントニオで最初のメキシコ系アメリカ人のエンパワメント活動を成功させたが、期待した白人進歩派との連携が、人種差別主義者の嫌がらせによってうまくいかなかった苦い経験を持つ。南西部全体にいえることであるが、公共セクターに食い込むごく一部のミドルクラスを除いて大半の人々は、低賃金労働予備軍として、社会的・経済的に周辺化されており、失業状態にある黒人と大差はなかった。⁽¹⁴⁾ サンアントニオは、一九五〇年代、白人と金持ちの「良き統治連盟」が牛耳っていた都市で、地元の役所やビジネス界は、

コルテスらの草の根活動主義に対して露骨な警戒感をもっていた。

こうしたリアルな経験への反省もあってコルテスは、アリンスキー・モデルに依拠しつつヒスパニック系のインパワメント活動に力を入れるべく、一九七三年にサンアントニオに本格的に入り、貧しい彼らに「声」を与える組織づくりに取り組んだ。その過程でカトリック神父や市井のリーダーを巻き込んで結成したが、COPSであった。

サンアントニオでは一九七七年に人種的不均衡を是正すべく、市議員選挙を小選挙区制へと改革する選挙制度改革が議事日程に上り、住民投票に付された。白人が反対するなか、COPS票が住民投票を勝利に導き、その結果、新選挙制度下で実施された同年四月の市議会選挙で五名のメキシコ系、一名の黒人が当選した。COPSは、「アリンスキーの非党派的戦略を維持しつつ、公選公職者には、その投票基盤を通じて影響を及ぼし」、サンアントニオの白人エリートが牛耳る支配構造に風穴を開けたのである。

選挙への影響力は、COPSをサンアントニオにおいて無視できない存在に押し上げた。その結果として、次のような成果を獲得することができた。(1) 同市のコミュニティ開発総括補助金(CDBG)プログラム補助金の獲得、(2) 「アカウンタビリティ・セッション」の意味を持つ立ち会い演説会の制度化、(3) 市債をCOPSが市役所との連携を行うための資金源にした点、(4) 貧困者居住地区への住宅・保健所などの大衆的公共財の主要供給者となった点(例えば、その財源として一九九四年には十億ドルの資金を集めた)。

COPSは、土地開発業者と距離を置きつつ、実地的な政治への関わりを強め、できる限り市当局との連携を密にした。他方で、支配的権力へのアクセス政治による「抱込み政治」にも最大限の注意を払い、「長年無視されてきたヒスパニック系住民の要求を議題設定する力」¹⁶⁾を獲得・維持することに自覚的であろうとした。だがそ

うであっても、ヒスパニック系住民だけに資する利益の拡大を目指しはしなかった。そうした慎重な姿勢の背後には、シカゴのTWOやロチェスターのFIGHTが、狭い、民族的アイデンティティを基盤に地元の経済開発に活動の力点を移した矢先に、民衆活動家的スタイルを弱め、多くのコミュニティ開発協会がその機能を果たしえなかったアリンスキー時代の苦い経験があったからである。

(3) 大都市圏組織(TMO)

ヒューストン(テキサス州) 中心部の社会基盤は、一九七〇年代の経済的な構造改革やミドルクラスの郊外化によって脆弱化の一途にあった。明確な近隣住区があるわけでもなく、地域の教会の力も弱かった。ヒスパニック系住民のまとまりは悪く、黒人の支配権力への接近も微々たるものであった。そうは言っても、両者が置かれている政治的地位は大きく異なっており、「ヒスパニックは、南部・南西部テキサスの大半で多数派を形成」し、「黒人とは違って人口的には塊が見られた」⁽¹⁷⁾。こうした事情も手伝って、カトリック教会はヒスパニックを中心に、市内にIAFの支部を作るのに意欲的であったが、実現への社会的・経済的環境は十分整っているとはいえなかった。

居住組織の活動がコミュニティ全体の利益を図る、と考えるコルテスらIAF幹部にとつては、地域社会にしっかりとした社会基盤を創出することが最優先課題であった。こう考えるコルテスらは、教区の開拓に優先的に取り組み始めた。「教区開拓」はカトリック的な手法であったが、プロテスタントが強いヒューストン南部でも新たな民衆の組織化には、この手法が有効だと考えたのである。

そのプロテスタント各派の動きであるが、当時、長老派、ルター派、監督派を中心とした世界教会主義の社会

奉仕事業部である大都市圏聖職者 (TMM) が中心となつて、COPPSを下敷きにIAFの受け皿作りを進めていた。コルテスは、一九七六年にヒューストン入りする二年前から同市を何度か訪れており、TMMの幹部との会合を持っていた。他方で、コルテスがイースト・ロサンゼルスでのIAF支部の設立に向かうことが既に決まっていたので、チェンバースはIAFでの研修経験を持つピーター・マルティネスをヒューストンに送り込み、聖職者との打ち合わせを続行させた。¹⁸⁾

この種の会合は、当然に地元経済界や政治家に強い警戒心を呼び起こした。ヒューストンは、「八階のスイートルーム」と呼ばれる財界と政治家・役人が長年、政治を牛耳ってきた土地柄である。IAFが聖職者と接触することは、彼ら支配層には地元貧困層へのたきつけと映った。また彼らは、教会が政治に関わることを嫌っていた。

そうしたなか、ボランティア・イン・サービス・トゥ・アメリカ (VISTAs) で活動した経験があるTMMの若い活動家、ロベルト・リベラは、COPPSの研修を受けるためにサンアントニオに向かうことを決めた。¹⁹⁾ 当地でリベラは、ヒューストンでの組織化の実績を無駄にしないために、カトリック修道女のクリスティーン・ステイブンスに支援委員会議長への就任を依頼した。²⁰⁾ ステイブンスは、COPPSを手本とする支援をしていたコルテスが、そのリーダーとしての才能を見出していた女性であった。²¹⁾

地元教区の社会奉仕事業部を統括しながら、地方支部長としてカトリック慈善団体、人間発達のためのキャンペーン (CHD) を切り盛りしていたステイブンスは、その後の二年間、聖職者の取り込みと資金集めに奔走した。その結果、一九七八年までに彼女は、カトリック、プロテスタント教会の一部を含む三二の教会・会衆から成る宗派連合をまとめ上げ、二〇万ドルの資金集めにも成功した。その結果、テキサスで二番目となるIAF

支部、大都市圏組織（TMO）が一九七九年六月に誕生した。ヒューストン全域を活動範囲とする世界教会主義的・多人種的なTMOにはピーク時には七万五千もの家族を代表する六〇余りの教会・会衆が参加した。また一九八〇年代に入ると、IAFⅡ「ヒスパニック」とのイメージを強く抱いていた黒人層もTMOに加わり始めた。TMOのリーダーは、地元にとって鍵となる問題——高い電気料金、不便な公共交通機関、学校のドラッグ問題——に焦点を絞り、活動の有益性と実効性を学んでいった。また、新たな参加者も多くのことを学ぶことができた。²² TMOのリーダーにとつての「教区開拓」とは、家族（私領域）とコミュニティ（公共空間）をつなぐ中間共同体の紡ぎ出し活動であり、教会を「より広い公的な役割の担い手」へと向けることを意味した。しかし、「下水容量、水の供給、アクセスの手段、人的要素といった基本をほとんど考えずにペテン師が建設したダーウィンの都市」²³ ヒューストンでは、近隣住区の果たす役割が大きいとはいえず、サンアントニオにおけるCOPSのような社会的パワーと政治的成果を必ずしも生み出すことはできなかった。

(二) コミュニティ組織化の社会基盤——家族・教会・コミュニティ

(1) 家族

チェンバースは、IAFを刷新するには、家族を守り、人々がそうした価値を大事にすることによって「人間性」の本質的部分でつながり合うことが重要であると考えた。貧しく無力な人々が政治的パワーを獲得するためには、相互的な利益に基づく協働が必要である。²⁴ こう考えるチェンバースは、アメリカ人の普通の家族が置かれた現状を次のように観察している。

アメリカの家族は、ATM（マネー・マシーン）となつてしまった。家族は、毎月毎月、食費、家代、家賃、車の維持費、他の交通費、さらには保険料、医療費、被服費、税金、光熱費、子どもの授業料を払う。親は、ATMに金を残こすために必死に働かなければならない。子どもに愛情を向け、世話する余力はほとんどない。⁽²⁵⁾

「貧困は家族の不安定性を生み出し、家族の不安定性はめぐって貧困を生み出す」⁽²⁶⁾。特に都市部で周辺化された貧困家庭は、アルコール中毒、薬物乱用、犯罪、病氣罹患に苦しんでいる。大卒に見合った専門的な仕事への道を諦め、四十代半ばで結婚したチェンバースは、子育てをしつつIAFの活動に奔走した。彼は、家族が持つ積極的な意義、劣悪な環境が子どもに及ぼす破壊的な影響力を人一倍理解できた。「危機はリアルなものである」。家族と教会が「制度的な力」を伸長できない限り、我々は、「巨大企業やマス・メディア、『恩着せがましい』政府の専門家の言いなりになつてしまう」⁽²⁷⁾と危機感を滲ませた。

チェンバースは、当初、組織化に宗教的訓育を入れ込むことには慎重であった。しかし、前述したような戦略的な組織化にとっては、宗教基盤の拡充、教区開拓は必要不可欠であった。こう考えるチェンバースは、組織化におけるユダヤ・キリスト教的伝統の解放的流れの持つ意味を改めて強調すべく、都市教区におけるベテランの聖職者を含めて、公民権運動や統一農場労働者組合（UFW）と何らかの接点を持つオーガナイザーやリーダーを補充しようと努めた。⁽²⁸⁾

チェンバースの薫陶を受けたコルテスも、家族の社会的機能について一定の留保をおきながら、チェンバースと同様の見解を示している。

家族にロマンティックであってはならない。リアルさを伴わない家族への情緒的な観念はファシズムを用意する恐れさえある。家族には抑圧的な側面がある。しかし、だとしても家族や伝統は有用であり大切である。様々な機能、要素は常に関連させて見る必要がある。私たちが人間的な存在になりえるのは、家族のためへの犠牲や妥協がもたらす家族生活を営む中での互譲の精神である。家族は、育て、育てられることを学ぶ場所である。⁽²⁹⁾

コルテスが、サンアントニオのウエストサイド地区での組織化において重視したのが、こうした認識に立つ「家族」の価値の重視であった。地域の組織化にとって、家族の価値や土着のリーダーシップを大事だと考えるコルテスと、彼のメキシコ系ルーツは無関係ではない。コルテスにとってヒスパニック系の貧しい労働者は、「子どもと教会に献身する」人々であり、彼らが家族について語ることは、教会を通じてコミュニティ組織に参加することを意味した。⁽³⁰⁾ コルテスは、「家族の価値を教会への感情」⁽³¹⁾に結びつけようとしたのである。

(2) 教会

エルネスト・コルテスは、先述したように一九七六年にサンアントニオからイースト・ロサンゼルスに活動拠点を移し、そこで統一近隣住区組織 (United Neighborhoods Organization: UNO) を結成した。サンアントニオのCOPSにあつては、三七の地元支部のうち三三がカトリック教区であった。⁽³²⁾ 「聖書」がコミュニティ建設のための「象徴」として機能した。サンアントニオにおけるIAFの組織化が部厚い社会基盤に助けられていたのとは対照的に、イースト・ロサンゼルスの社会基盤は、TMOのヒューストンと同様に貧弱であった。そのため個人ミーティングからハウスミーティングに至るまでの関係的組織化は、教会の力に依存せざるをえなかった。

UNOに参加する三二の教会組織のうち二二がカトリックで、三分の二の割合を占めた。⁽³³⁾

コルテスがイースト・ロサンゼルスに移った後も、IAFとサンアントニオとの関係には変化はなかった。この時期のIAFには、一九七〇年代のカトリック社会思想や「解放の神学」が影響を与えていることが窺える。

カトリック教区は、権力核を含めて他のアクターとの協力関係の構築を目指すには欠くことのできない基礎的共同体であった。テキサスIAFは、権力エリートへの対抗組織を拡大する要として、教区ごとの参加、住区全体に關係する身近な問題（排水路、下水道・悪臭）への取り組みを最優先してきた。教区の重視は、政治権力を含む他の権力保持者との協力関係を構築する上で重要なことであった。⁽³⁴⁾ 教区ごとの住民参加は、時間の経過とともに実効的なものとなり、一九八〇年代に州大に拡大したAS教育イニシアティブや、バリオと呼ばれるメキシコ系住民の住む近隣住区への給水サービスなどの活動の促進に役立つた。⁽³⁵⁾

テキサスIAFは、不買運動などアリンスキの直接行動主義的側面と、COPSを主導するコルテスの新たな戦略の両面を有する。新しい側面が教会との關係であった。カトリックとして育ったコルテスは、大学院ではラインホルド・ニーバー（一八九二—一九七二）のキリスト教現実主義やドイツ生まれのアメリカの代表的なプロテスタント神学者、パウル・テイリツヒ（一八八六—一九七五）らのプロテスタント神学を学んだ。そして、実践活動の場ではカトリックの社会教説をプロテスタントの社会的福音と結びつけた。彼は、宗教と政治の相互浸透が必要であると考えたのである。⁽³⁶⁾

結成当初こそアリンスキ・モデルに倣うところが多かったCOPSは、PTA、ソーシヤル・クラブなど多様な組織・団体と連携を図り、地域の教会、特にカトリック教会を重視するようになった。⁽³⁷⁾ その背後には、教会以外の組織は安定さに欠け、予想される政治的な対立にとっても信頼できないとの考えがあった。こうしてCO

PSは、教会・会衆と密接な協力関係を発展させ、宗教的伝統を政治的パワーに結合する「信仰に基づくコミュニティ組織化」⁽³⁸⁾を血肉化していったのである。

教会・会衆といったIAFの社会基盤は、米北部でそうであったように労働組合がBYNCのような組織に戦闘的権力を与えたアリンスキー時代と比べて保守的である。しかし、宗教組織の考えやイデオロギーは一枚岩ではもとよりのない。聖職者や教区民の立場も多様で、リベラルもいれば、進歩的、急進的な人もいる。地域共同体の組織化にとって重要なのは、教会の信条内容の違いがもたらす分裂の争点へのコミットを回避するIAF指導部の考え方であり、IAFが活動する「地域あるいは州レベルの政治的環境の特定の切り面を色づける政治文化や政治的遺産」⁽³⁹⁾の方であるのかもしれない。いずれにせよ、BYNC時代のジョージ・マンデライン大司教やバーナード・シエイル司祭、COPSにおけるサンアントニオの大司教バトリック・フロレスらは社会活動に非常に積極的に取り組む実践的な宗教指導者であった。⁽⁴⁰⁾

アリンスキーが自己利益を強調し、教会を人・金といったハードリソースの貯蔵庫と見たのに対して、コルテスは教会を「諸組織の組織」⁽⁴¹⁾にしようとした。「自己利益はコミュニティと結びつけられるべきであり、そうした結びつきを作るためには根を下ろす必要があると確信していた」⁽⁴²⁾バラク・オバマに似てコルテスは、ウエストサイド・カトリック教区の聖職者に面談し、一般信徒の主要リーダーの氏名を聞き出し、各教区で組織化の先頭に立つ可能性がある人々を探し求め、彼らの「声」に耳を傾けた。教会は、各組織に属し、団体の経済的自立性を高めるために日曜礼拝時の献金から会費を支払うシステムを構築することを目指した。

こうして、「諸組織の組織」としての教会は、COPSの資金面での安定的な基盤となったが、そればかりではない。新生IAFは、「信仰の伝統と女性信徒のリーダーの關係的な強さ」⁽⁴³⁾にも大いに注目した。ヒスパニッ

ク系カトリック教区が女性のエンパワーメントの社会基盤ともなった。カトリック教区は、約二五年に渡ってCOPSの安定的な財政的基盤の支柱であり、女性エンパワーメントの担い手となったのである。宗教・信仰・コミュニティ・諸組織の結集を目指す「住宅の神学 (theology of housing)」の上に立ち、メンバーは人前で話し、討議を主導することを通じて、先述したステイブンス女史はもとより、例えば、何の変哲もない普通の主婦であったカトリックのピアトリス・コルテス (Beatrice Cortes) も、一九八一年には第四代COPS会長に就任できたりした。⁽⁴⁴⁾

(3) コミュニティ

チェンバースやコルテスらが、コミュニティの組織化活動は、家族と宗教の絡まり合った価値観に根を置くべきだと考えたことは先述した通りである。彼らの政治活動の場は、プロテスタント神学者パウロ・テイリツヒの社会哲学を反映する、「力と愛の両者によって支配される領域」⁽⁴⁵⁾に求められた。

こうした領域で活動を展開するテキサスIAFは、近隣住区や人種といった単一の基底集団を越えた、「幅広い基盤に基づく」コミュニティ組織へと成長していった。それは、白人と同様に黒人を、またカトリックと同様にプロテスタントを包摂しようとする多人種的で異宗派間的な組織化に努力した。⁽⁴⁶⁾「信仰に基づく組織化」の先駆的存在となったテキサスIAFは、著名な社会学者のウィリアム・J・ウィルソンによって、「草の根レベルで実効的な多人種的な政治的提携」の例として、次のように紹介されている。

テキサス州におけるIAFは、市政、州議会、知事公邸の政治決定に効果的に影響を及ぼしてきた州大の模範

的なネットワークを創出した。さらにネットワークは、白人、黒人、メキシコ系アメリカ人、カトリック、プロテスタントが共通して関心や利害を有する問題に力を合わせて立ち向かうべくうまく自らを組織した。⁽⁴⁷⁾

ウィルソンは、テキサス I A F が人種を越えた協働を生み出し、生き延びた理由について、以下の三点が重要であったと指摘している。(1) 信頼とコミュニティ一体感を生み出すために、メンバーの幅広い宗教的原理への献身を頼りにした点、(2) 争点は地域の合意から生まれ、その結果、取り上げる争点は分裂的ではなく合意可能なものとなった。また、こうした争点は、常に人種中立的な仕方でもフレーム化された点、(3) ヒスパニック、黒人、白人のリーダーは、地域の I A F 組織で結びつく。テキサス I A F の議事日程外の人種の争点にも対応できる準備をしていること。居住地域に特有の争点を提起する他組織あるいは企業にも自立的に対応しうる準備を整えたこと。こうした態勢の下、争点を非人種的に定義し、国民全体に潜在的に有益なことを強調できた点。⁽⁴⁸⁾ その結果、テキサス I A F は、「テキサス州中の様々な提携組織とのネットワークによって、公教育改革や医療制度、農場での安全性に関する州法制定」⁽⁴⁹⁾を導くことができたのである。

バラク・オバマは、シカゴ・サウスサイドの多文化的で活気溢れる日常生活を生きたコミュニティ・オーガナイザー時代を振り返って、次のように述べている。「地域社会の若き活動家として、わたしはよく、黒い肌の住民と褐色の肌の住民両方に影響を及ぼす問題について——問題のある学校から、不法投棄や、予防接種を受けていない子どもたちの問題まで——ラテン系の指導者と連携して仕事にあたった」⁽⁵⁰⁾。COPS もこれに似て、コミュニティ・オーガナイザーは、「共同体にとって必要なことについて審議し、政治活動に参加するために必要な手だてをメンバーに提供することによって」、「長いあいだ見捨てられてきたサン・アントニオ市の幾つかの地域に、

数十億ドルに値する道路や学校、下水道、そして公園といったインフラストラクチャーの改善をもたらした⁽⁵¹⁾のである。こうして、メンバーにカトリックやヒスパニックが多いCOPSは、一あるテキサス州の組織の中でも最大で、長い歴史を誇る「国内最強のコミュニティの組織」⁽⁵²⁾へと成長し、一九九〇年のCOPSの設立大会には一万人もの人々が参加するほどになったのである⁽⁵³⁾。

I A Fの最有力傘下組織となったCOPSは、テキサス州における姉妹組織の設立に熱心に取り組んだ。その最初の成果が、ヒューストンでのTMOであったことは先述の通りである。COPSが中心となってコルテスらが作り上げた地域組織は、四半世紀を経てテキサス州内だけでも、州西部のオースティン、エルパソ、北部のフォートワース、北東部のダラス、南東部のボートポートオーサーオレンジ地域、裕福な監督教会派、ルーテル派、ユダヤ会衆が多いヒューストン南西のフォートベンド郡、最貧困地域の低地リオ・グランデ川域、南西部のデルリオイーグルバスなどと数多い⁽⁵⁴⁾。

その後、I A Fは、アリゾナ州中部の州都フィニックス、南部のトゥソン、南西部のテンピー、ニューメキシコ州中部のアルバカーキー、ネブラスカ州東部に位置する州最大の都市オマハ、アイオワ州南部のデモイン、ルイジアナ州南東部に位置する州最大の都市ニューオリンズ、北ルイジアナなどにも広がった。これら中西部のネットワークの活動を強化するために、I A Fは、一九九六年に本部をニューヨーク（一九七九年に教会財産の横領疑惑が濃厚なジョン・パトリック・コデュー枢機卿がI A Fとの大恐慌以来のシカゴ大司教管区との絆を破ったので、I A F本部をニューヨークに移した）からシカゴに移した。移転の目的は、シカゴ大首都圏に一つの主要な傘下組織を設立することに連動させ、中西部への活動を拡大するための足がかりを作り出すことであった。こうした経緯を辿ってI A Fは、二〇〇〇年には一三三三の団体が加盟し、四八の傘下組織を誇るまでになった⁽⁵⁵⁾。

現在では、カナダやイギリス、オーストラリアにも姉妹組織があり、南アフリカにも活動の舞台を広げ、国内外で六三の支部を有している。

三 「社会基盤の編み直し」と組織のエンパワーリング

先述したように、アリンスキー的な組織化モデルの限界への答えは、一九七〇代初頭までにIAF内部で形づくられていった。論点は、組織が動き出し、特定のプログラムが実施され、法律が整備されても、人々は相も変わらず無力（パワーレス）である、という現実の克服に向けられた。

普通の人々の生活に影響を与える政治的決定権力がミドルクラスや働く貧困層の手にあったことはほとんどなかった。そうしたなか、「家族や友人のインフォーマルな社会的ネットワークは、貧しい人々が日々の暮らしで生き残るのを手助けするのに必要不可欠な役割を果たし続けている。しかしながら、外部の資源との関係を欠くと、これらの生き残ったネットワークも人々が貧困を克服する手助けとしては効果がない」⁽⁵⁶⁾。こうした認識に立つ新生IAFは、支配的権力構造を前にしてより大きな力を発揮するためには、政治権力とそれが寄って立つ社会的基盤を問い直す作業がどうしても必要であった。IAF指導部は、「権力」の理解、パワーと組織化の関係の理解に注力すると同時に、政治的エンパワーメントのための社会基盤 (social fabric)、すなわち人種・民族・富・教育・雇用・宗教的価値が織り上げる地域社会の社会的資本の刷新・強化の重要性を主張したのである（本稿では、「social fabric (社会基盤)」は、次のような意味で使っている。The composite demographics of a defined area, which consists of its ethnic composition, wealth, education level, employment rate and religious values.)⁽⁵⁷⁾。組織化のあり方を「権力」自体の捉え方の再検討の上に刷新し、民主的な「構造」の編成に精力を注ぐのであった。

(一)「関係的」パワー論

「新生IAFにとって個人と組織、争点と政治の関係は、次のような問いを民衆が考え抜くことにかかると考えられた。(1) 組織の目的の幅が、単一の問題を解決するための広いものであるとすれば、どうか。(2) 我々の目的が、幅広い問題に対応する活動を可能とする力を強化することだとすれば、どうか。(3) 従来にはなかった高い水準の政治的決定過程に我々の声を届けうる権力はいかにして獲得できるのか。(4) 我々が、市や州の政府の政策過程での頻繁に登場するプレーヤーとなれたとして、その結果はどうなるであろうか。(5) 単一の争点で敗れた時はもちろん、勝利した後でも組織が生き残るとすれば、そうした組織はいかなるものであろうか。⁽⁵⁸⁾

これらの問い掛けに対してチェンバースは、「我々の組織の唯一の目的は、長い時間をかけてパワーを貯めることである」と断言した。「我々が蓄積すべきパワー」は残忍な権力ではなく、「関係的」なそれである必要がある。この点について彼は次のように述べている。「強さと弱い者いじめには大変な違いがあり、パワーは十分に実践的(プラクティカル、現実的)で、柔軟で、賢明で、忍耐強くありうる。パワーは十分に正義を実行でき、パワーがあれば人に寛大でもありうる。そうしたパワーは秩序正しく動き、つぶれないし、つぶされない。誤ったパワーの使い方は、パワー自体を破滅させる芽を社会に植えつけるものである。⁽⁵⁹⁾

アリンスキーが、「一方的パワー」(「power over」 others)と「権力」を理解したとするならば、新生IAFは、「関係的パワー」(「power to」 act collectively together)として理解しようとした。かつて著名な政治学者であったE・E・シャットシュナイダーが、「民主政治におけるあらゆる権力関係は相互的なもの⁽⁶⁰⁾」であるといったように、チェンバースは、「パワーには、行動すると同様に『従う』という次元と、影響を与えると同様に影響を受けるという次元がある」ことを重視したのである。

米南西部においてCOPPSやTMOなどテキサスIAFを主導したコルテスも、パワーを「一方的 (unilateral)」なものではなく、「関係的 (relational)」なものとして捉えようとした。⁽⁶¹⁾コルテスは、近隣の人々、仕事仲間、教会のメンバー、学校での交流・行動を共にする人々とのつながりから生まれ出る関係性を重視した。IAFの活動家にとっては「敵」も、大義の点で将来の伴走者になる可能性を有するために、自分たちのドアは開けておくことが重要だと考えられた。コルテスにとっては、「敵」との関係性こそが重要であった。

そしてコルテスにとって政治システムに関与することは、システムを動かす人々と敵対するとしても、その中から協働していく努力を積み重ねることが必要とされる、ということを意味した。コルテスは、敵対から協働の中に現れる政治を「癒しの政治」として、次のように述べている。

組織の最も激しく対立した衝突によっては、その後では、政治的あるいは個人的な関係へのダメージがどのようなものであっても、リーダーたちにはそれを修復する「癒し」のプロセスに取り組みようと話している。

△中略▽異なる時、異なる場所、異なる状況、異なる争点——そうなのだ。永久の敵など存在しないし、また永遠の友も存在しないのだ。ただ利益、永久の利益があるのみである。⁽⁶²⁾

こうした組織哲学の上に立つ幅広いパワーと多様な価値観をベースに「社会基盤を編み直す (reweaving the social fabric)」という視点が、新生IAFの組織化原理の中心に据えられた。アリンスキーの組織論の限界をチェンバースとコルテスは、権力を「互酬的な関係性」と捉えることによって克服しようとしたのである。実際に、オーガナイザーやリーダーは、「関係性」という概念をリーダーシップ、権力、組織化、民衆学習の中心に据え、

コミュニティ全体に影響を及ぼす具体的な課題（道路や街灯など社会的インフラの整備、ルール遵守など）を取り上げ、その解決のために行動を起こし、権力者に現状とその改善への取り組みについて自ら説明し、また彼らの説明責任を迫っていった。

従来の「コミュニティに基盤を置くイニシアティブ」やコミュニティ開発公社（CDS）は、権力強化（エンパワーメント）の側面を軽視してきた嫌いがある。これに対してテキサスIAFは、低所得者コミュニティの政治的エンパワーメントにとって有効な媒介組織となることを目指した。「働く人々とその家族が自分たちの民主的な政治において強力な役割を集合的に鍛えることによって、彼らの尊厳⁽⁶³⁾を高めたのが、前述したチェーンパースの「関係的パワー」論であり、それに基づくコルテスの「合意の政治」戦略であった。パワーの関係的編成と「合意の政治」戦略が、無力の人々をエンパワーする方向へと権力を関係的に再編成し、日常ベースでの「合意の政治」を実践すること、政治的諸制度を対立と合意の矛盾的統合作用とみることが、新生IAFの基本姿勢となったのである。⁽⁶⁴⁾

（二）関係的組織化

IAFは、組織化において一対一の、それも時には一時間を超える対話を重視した。相手の意見に耳を傾けるという行為を通してお互いが思い描く（あるいは思い込んでいる）公共的世界についての意見を交える。こうした対話は、「非公式で体系化されないやり方で、人々が共有できる野心や経験を基盤に関係性を築く。皆がいつもしていることですが、IAFの一対一対話は、こうした関係性を組織化する体系的な一歩だといえます」とコルテスは筆者に語ったことがある。バラク・オバマも同様のことを述べている。「練達の組織活動家は、時間を

かけて、多くの意見を聴取し、問いかけの言葉を練り直し、そしてグループを構成する個々人が自発的に、彼らが共有しているものを見つめはじめるまで時を待つ。優れた組織活動家はこうして忍耐強く、活動を活性化する原則や行動計画がグループの内側から現れて来るのを見守るのである⁽⁶⁶⁾。

チェンバース、コルテスら新生 I A F の指導者は、彼らの組織内部での関係性も発展させ、それを持続させる方法を、すなわち、親近感のみならずアカウンタビリティの上に確立された組織内での関係性が持つ機能をことのほか重視してきた⁽⁶⁷⁾。個人と集団に対する内部へのこの種の責任感の欠如が諸々の多くの草の根運動を短命にしてきたなか、新生 I A F は活発な活動を長期に渡って持続しえたといえよう。

アリンズキー時代の I A F が常に同じ顔の少数の制度的リーダーに依存していたのとは違って、一対一対話が織り成す「聴く」ソフトアートとしての対面的な集いは、C O P S 以後の刷新された I A F の「関係的組織化」を底辺から支える仕組みとなっていた⁽⁶⁸⁾。会員の参加と組織の権威を創発的に確保しようとする「関係的組織化」は、コミュニティ・リーダーが行動への共通基盤を人々と一緒になって見出し、またより幅広いコミュニティの利益のために活動する能力の開発のために働いた⁽⁶⁹⁾。この試みは、新生 I A F が、従来の教会や労働組合等外部組織への依存、支持基盤の狭隘性からの脱却をいかにして図ればよいのかという課題への一つの回答でもあった。

サンアントニオ政治の主要アクターのひとつとなった C O P S ——「ザ・モデル」⁽⁷⁰⁾——を中心として、テキサス I A F 組織は、「アリンズキーが一つの争点で勝利しようとする資源を動員するために作り出した種類の単なる圧力集団ではなく、より民主的な参加を促すいっそう拡張的な形態を作り出すため」の社会的な資本を紡ぎ出すことができた。I A F は、利益や権力政治を無視はしなかったが、それ以上に、価値を利益に、コミュニティ形成を政治活動に結合するために関係的組織化という「ソフトアート」を実装することに努力したといえよう⁽⁷¹⁾。

テキサスIAFは、「地元近隣住区を基盤とした多民族的な圧力集団」⁽⁷²⁾として、一九七〇年代、八〇年代に実施した教育改革や、国境沿いの掘っ立て小屋への給水サービス事業などで成果を得るが、先述したようにウォレンは、成功の社会基盤としてヒスパニック系カトリック教区の濃い人間関係の存在を改めて指摘している。⁽⁷³⁾オーガナイザー、リーダーが各レベルで責任をもって協力して計画を立て、政治家や公職者に政策を提言し、あるいは彼らに政策へのアカウンタビリティを求めて行く。IAFは、「会衆の連合体」であると同時に、関係的組織化を通じて「諸組織の組織」の性格を強めていったのである。

(三)「権威と参加」のハイブリッド構造

COPSの組織構造としてマーク・ウォレンは、次の諸点を指摘している。(1) 会員は団体会員≡教会である。(2) 組織は一時的な連携ではなく団体代表から構成される。(3) 指導部はこれらの団体の会員から広く集められるが、リーダーは単一の組織で働く(コミュニティ・リーダーは、正規スタッフからは充員されない)。(4) その結果、(1) 会員教区/近隣住区のリーダーが出身の特定利益を追求し、(2) 部分の集積を超えた全体利益が実現する、という二つのことが同時に進行する。⁽⁷⁴⁾

コミュニティ・オーガナイザーは、リーダーと協働し、ハウスミーティングを開催し、そうした場を中心に種々の戦略的活動、計画達成評価のリズムを作っていく。さらに彼らは、権力保持者に政治的な責任をまっとうさせることの意義を住民に教える。⁽⁷⁵⁾ 会員間で繰り広げられるハウスミーティング、公職者を相手に制度化した「アカウンタビリティの集い」、「アカウンタビリティのタペ」の実践を多重に組み込む相互学習に基づく権威的ヒエラルヒー構造が、より幅広い参加的組織に十分基づいた組織運営を可能にさせる。コルテスは、こうした取り組み

について次のように述べている。

アジェンダは、一年にも及ぶハウスミーティング、教会や学校での小集団の会合で試行錯誤を繰り返しながら鍛え上げられてきたものである。会合の場で、人々の個人的な苦痛は公共アクションへと変容できたのだ。こうしたプロセスを経験することによって新しいリーダーシップが育っていく。働く人々とその家族の尊厳は、彼らが、自分たちのデモクラシーの統治で強力な役割を集合的に鍛えることによって保たれるのである。こうした会話のキャンペーンは、アジェンダを制御できる力を持った幅広い基底集団、公職立候補者に彼らの関与に対してアカウンタブルにするのに必要な公共的な課題を実行に移し、そのフォローアップにも関与する基底集団を作り出す。⁽⁷⁶⁾

こうした協働作業を通して教区会員や近隣住区のコミュニティ・リーダーが求める部分利益が、「現場の政治」の創発性によって駆動されることによって幅広い全体利益へとまとめ上げられるのである。

COPSをザ・モデルとする米テキサス・南西部IAFネットワークは、地元コミュニティの種々の社会組織出身のリーダーと地域で働くプロのオーガナイザーとの協働をベースに展開されていった。この種のスタッフ組織は、全米におけるプロのオーガナイザーとしては最大の最もよく訓練された組織の一つである。南西部IAFは、スタッフとして約六〇名のオーガナイザーを擁し、またCOPSはサンアントニオに約四〇名の副長を配している。彼らスタッフ、オーガナイザーは、二カ月に二、三回、学者招聘セミナーや政策分析テーブルで定期的顔を会わせる。こうした場を中心に各自が属する地方ネットワークの仕事や課題が紹介され、話し合われる。

これらの活動がIAFのネットワーク活動に知識・情報・感覚の共有に向けての杭を打ち込み、全体の一体性や凝集性の強化が図られるのである。

コルテスは、大企業や専門家が支配してきたエスタブリッシュメントの世界に対抗しうる民衆の政治的能力の開発を重視した。「人々がチャレンジし、組織を作り、人民の声に耳を傾けるといふ、これまでとは違ったスタイルのリーダーシップであり、政治のことも意味していたのである」。(バンス) ヒューズの言葉では、それを「生成・変形トランスフォーメーションのリーダーシップ」と呼ぶ。彼の見解では、「民主党の場合は、システムを買い込むだけのいわば商いトランザクション型のリーダーシップ」であつた。⁽⁷⁷⁾

先に見たように、階級や宗派を交差する「幅広い基盤を有する組織づくり」を目指したIAFは、教会会衆、地元学校、労働組合、その他の「コミュニティに基づく組織」を会員団体とし、個人はそれらを通じて活動を行う。地方組織と全国IAFとの関係は単なる連携関係ではない。全国IAF理事会・執行委員会、執行ディレクター、地域ディレクター、地方IAFのオーガナイザー、コミュニティリーダー、個人メンバーにタテ・ヨコに「参加と権威」の構造を入れ子的に組み入れたハイブリッドな連邦的代表構造となっているのである。

その上でコルテスは、人間関係のネットワークに埋め込まれた関係的パワーとしての社会資本を上で見たと連邦型ハイブリッド組織に蓄積することこそ、「普通の市民や納税者が、彼らのコミュニティにおいて権力と政治の関係を再編成しうる能力と自信を築き」⁽⁷⁸⁾、そのことを通して民衆の政治的な力を引き出しうると考えたのである。⁽⁷⁹⁾

四 「学びの共同体」としてのテキサスIAF

(一) 「始まりの教育哲学」

テキサスIAFは、一九九二年六月にテキサス教育エージェンシー(TEA)と協力して、低所得者層が多く住む地域の全二二校を対象とする提携学校(AS)構想を打ち出した。対象となった学校の多くは、黒人あるいはヒスパニック系が多く住む地域にあった。白人同様に黒人もヒスパニックに強い偏見を持っていた。そうした人種の緊張のなか、ASイニシアティブは、分裂的イデオロギーによる対立を避け、「目に見える具体的活動(雨水用下水管の修理や壊れた信号の修繕、クラックの密売所の一時的な閉鎖、警察の抑止力の向上)に焦点を絞って学校改革に取り組むことができる政治的な力」を開発しようとした。

ASは具体的には、(1) 近隣住区学校の支援(周りのコミュニティとの絆の形成)、(2) 近隣住区の改善と学校の活性化の結合、(3) 学校文化の現状を世論に訴え、文化を変容するために保護者の学校への関与を求めること、(4) もめごとが絶えない都市部の学校や近隣住区の改善に資するスキル・関心を有する市民(顧客ではない)の育成を目指した。⁽⁸¹⁾

こうした目標を掲げるAS教育イニシアティブは、学校改革の主流ともいえる「市場化」モデルに対抗して、学校へのコミュニティの関与に向けた組織化に重点を置くものであった。この戦略は、学校への親の参加が従来、学校争点とコミュニティ争点を結びつけられずにきた点を問題視し、両争点を交差させる磁場として地元の教会・宗教組織を重視したのである。⁽⁸²⁾

デニス・シャーリーは、テキサス州で最も貧困な地域の一つで展開するヴァレー・インターフェイス(VI)

を取り上げ、VIが教会をベースとしたコミュニティ組織化が学校改革にどのような影響を与えているか、学校の変化が、政治・行政と切り離された地元民に市民的な積極関与の場所としてどのように機能しているかを調べた。⁽⁸³⁾その結果、シャーリーは、VIも含めてテキサスIAFのA S イニシアティブが発揮しようとしたこの種のコミュニティ関与は、「低所得者層の地域共同体における政治的リーダーシップの耕しを促すというより大きなアジェンダに深く絡まっている」ことを確認した。⁽⁸⁴⁾

シャーリーは、父母の学校への関わりを調停型と生成・変形型に大別している。前者は、大半の学校がこれまでに依拠してきたモデルであり、権力をめぐる争点 (issues of power) を回避し、親に学校文化の維持への受動的役割をあてがうところに特徴がある。これに対してA S イニシアティブの取り組みは、親に従来の調停型関与パラダイムとの決別を促し、学校への参画を通じて近隣住区の権力構造をも変えうる変革の担い手としての役割を期待したのであった。

コルテスらは、学校への親のこの種の生成・変形型関与を通じて、コミュニティを学校の中心部に引き込み、学校をコミュニティの政治的活性化のための基地として利用することで、学校とコミュニティ関係への調停型アプローチの限界を超えることを目指した。⁽⁸⁵⁾

C O P S が活動するサンアントニオでは、大都市圏同盟 (M A) も加わり、一九九二年にQ U E S T プロジェクトがスタートしたことは先述した通りである。低所得者層が多く住む都市コミュニティを基盤に展開された学校改革は、学校に多目的センター的要素を強化させ、学校が近隣住区の安定にとって重要であることを認識させるのに役立った。その結果、「学校とコミュニティの境界は非常に通氣的 (多孔的) になり、両者はほとんど融合することになった」⁽⁸⁶⁾。Q U E S T を含め、地域の安全取り締まり活動、放課後プログラム、学際的カリキュラ

ム、アクセス可能な大学教育、低所得者用住宅は、サンアントニオにおける学校改革と近隣住区の発展へのCO PS、MAの統合的・体系的戦略の産物といえるであろう。⁽⁸⁷⁾

以上、見てきたように、ASインシアティブ始め他のテキサスIAFが関わった学校は、オーガナイザー、リーダーの活動を始めとし、市民活動主義のネットワークによって巨大なテキサス州教育システムに一定の影響を及ぼすことができたと評価できよう。学校での改革に向けた様々な試行錯誤は、教育行政官の指図ではなく、数多くの保護者や教師、コミュニティ・リーダーの議論に基づくものであった。学校はそうした意味で、熟議民主主義の原理をもとに展開する「コミュニティのセンター」⁽⁸⁸⁾の色彩を強く帯びることに成功したといえよう。

十を超えるテキサスIAF参加の学校改革を検討したデニス・シャーリーは、こうした多方面に放射的に相互作用しあう学校改革の考えと実践を「始まりの教育哲学」⁽⁸⁹⁾と呼んだ。テキサスIAFのリーダーやオーガナイザーは、セクト的・綱領的なレッテル張りにあえて抵抗する。多様な観点・視座が彼らの間で創発し、そこに発酵する「教育哲学」がコミュニティに基礎を置く多くの社会組織と共鳴しつつ、学校そのものを変形するのである。

ただ、こうした「始まりの教育哲学」が孵化した地域社会は、緊要性が高いコミュニティ・ニーズを中心に結束し、階級的・民族的に分断される可能性がある対立的争点を回避はできたが、結果として相互排他的な要求も少なくないという課題が残った地域もあった。⁽⁹⁰⁾ テキサス州内の大半の学校は、テキサスIAF、ASインシアティブの活動が届かないエリア外にあり、ASが指針とする組織化原則・方法を持ち込むのは容易くはなかった。「始まりの教育哲学」⁽⁹¹⁾にあつては、学校改革におけるコミュニティの役割を単純に「神話化」することに慎重であるべきであろう。

こうした問い掛けのなかで、「始まりの教育哲学」をIAFのリーダーたちが一般会員や近隣住民に広く理解

させる試みをデニス・シャーリーは「教育の政治学」と呼び、テキサスIAFのリーダー、オーガナイザーには次の点の理解が求められたと指摘している。(1) アリンスキーのラディカリズムとアリンスキー以後の遺産の正確な理解、(2) テキサスIAFが州下院法案七二の成立(一九八四年)後に教育政策で影響力を發揮し、協力関係者を拡大させた経緯の理解、そして(3) 直接接触の場を使って多面的に個人の「声」に傾聴しようとする低所得者層に対するアプローチの検証⁽⁹²⁾。

(二)「学びの共同体」

シャーリーは、こうした理解を求められるIAFのリーダーやオーガナイザーの政治的能力の開発・訓練の具体的方法として、以下の三点に注目している。⁽⁹³⁾ (1) 週末リーダーシップ修養会。これは教会やセミナーで行われ、(1)組織化活動の思想的基盤をユダヤ・キリスト教に置き、(2)市民的文化(討議、ハウスミーティング、公的活動、交渉、互酬性)を養い、また(3)「関係的権力」観を發達させることが期待される。(2) 全国研修セッション。これは、全国IAFの地域ディレクターが指導するリーダー、オーガナイザーの一〇日間自己研修コースである。リーダーらは、問題解決コア科目の受講、討議を通じて、過去の組織化努力や、政治、権力への自らの考え方を反省する機会を得る。そうした学習の場で彼らは、他の地域のリーダーらとの交流を深める。⁽⁹⁴⁾ (3) 有識者・研究者・ジャーナリストらのセミナー(テキサスIAFは一九八九年にこの種のセミナーを開始)。テキサス大学オースティン校公共政策研究科との共催、あるいはフォード財団、ロックフェラー財団の支援があつて開催されたセミナーには、コーネル・ウエスト、シーダ・スコッチポル、ジーン・エルシュタイン、メアリー・グレンドン、レスター・サロー、ジェームズ・コマー、ウイリアム・デイモン、グレン・ラウリー、マイケル・サ

ンデル、チェスター・フィン、セオドア・シザー、ロバート・パットナム、エドワード・フィスク、ハワード・ガードナーといった著名な研究者が招かれた⁽⁹⁵⁾

では、こうした「教育の政治学」の内容の特徴とは何なのか。この点についてもシャリーリーの指摘は有用である。彼は、次の四点を指摘している。⁽⁹⁶⁾ (1) 公共政策の争点についての諸々の視座の曖昧さと異類混合性の強調、(2) 西欧の知的古典（ギリシアの歴史家トゥキディデスからトクヴィルまで）を靈感・市民的再生の源泉として準拠している点で保守的性格を有するが、それと同時に、ユダヤ・キリスト教の伝統とアメリカの民主主義的・連邦主義的伝統の解放的潮流を主唱している点。(3) セミナー等を主催するコルテスの図抜けた知力は英雄的ですらある点。⁽⁹⁷⁾ 傑出した読書家であるカトリックのコルテスが、特にニーバーやテイリツヒらのプロテスタント神学を研究したことは先述した通りである。⁽⁹⁸⁾ (4) 識字能力や英語能力に問題がある参加者に対しては、コルテスらオーガナイザーが最初の家庭教師の役割を引き受ける。一般会員は、こうした機会を通じて政治的スキルを学び、発達させる。彼らは、「争点や問題に関する公的な情報をいかにして入手するのか、公的集会に向けていかに準備するのか、戦略をいかにして企てるのか、役人とのように対峙するのか、関係するニュースメディアをいかにして手に入れるのか」⁽⁹⁹⁾。これらは、常に意識される訓練テーマである。

ワークショップ、セミナー、訓練セッションの「ミニ大学」を、コルテスは「学びの共同体 (community of scholars)」⁽¹⁰⁰⁾と呼ぶ。参加者は、単に書物や講話だけではなく、シカゴやテキサスで様々な社会行動を引き出してきた古くからある地域の口述文献を含む歴史知識も学ぶ。⁽¹⁰¹⁾ アリンスキーによるコミュニティ組織化のバイブルともいえる一九四六年の著作『ラディカルズのための起床ラップ』(Renville for Radicals, New York: Random House, 1946. [長沼秀世訳『市民運動の組織論』未来社、一九七二年]) やコミュニティ運動の方法論を提唱した一九七

一年の著作『ラディカルズのためのルール』(*Rules for Radicals: A Practical Primer for Realistic Radicals*, New York: Random House, 1971) が教材として使われたりするが、実際の「教師」は経験と省察であった——現実の世界では何が働い(ワーク)ているのかを学び、そして時間をかけてなぜそうであるのかを学んだ。コルテスにとって意義ある一つの特徴は、IAFにおいて彼や他の人々が築こうと考えた類の民衆組織へのビジョンを發展させたことである。「IAFは何であるべきか。IAFはどこへ導くべきか。貴方は何のために組織化してきたのか。民衆に何を学んで欲しかったのか」⁽¹⁰⁾。

真に必要な民主的リーダーシップとはいかなるものか。この問題を考える場合、例えば、著名な政治学者、シドニー・ヴァーバらの著書『声と平等』(Sidney Verba, Kay Lehman Schlozman, and Henry E. Brady, *Voice and Equality: Civic Voluntarism in American Politics*, Cambridge, MA: Harvard University Press, 1995) は多くのコントに満ちている。しかし、コルテスらは、同書は、政治的不平等を資源(時間、金、市民的技能)の社会経済的偏差を通じて分析している点では評価しつつも、不平等の原因と帰結の集合的過程を十分に扱っていないと批判する。コルテスらにとって重要なのは、「自らの経験から物事を長い時間的展望の中で考え、経験を再考し、自分たちが住んでいる地域、自分たちの国家、社会について、より幅広いビジョンを發達させる」⁽¹⁰⁾能力であり、その能力を力とした「声」を集合的行為としての「政治」へと導き、他者との、あるいは他者との間での市民的で平等な関係性を構築する能力である。

コルテスが伸長すべきだと考える市民的能力は、シェルドン・ウォーリンがいう「政治性 (politicalness)」という概念に通底する。ウォーリンによれば、「政治性」とは「われわれの共同の集合的生活への配慮と改善に参与して責任をもつことの意味を知り、かつそこに価値をおく存在へとみずからを發展させていくわれわれの能力」⁽¹⁰⁾

である。民主的な参加は、公職者を選ぶ選挙への参加にとどまらず、他者との協働的行為を立ち上げ、率先して自発的に行動することが必要とされる、との主張である。

貧しい人々が置かれた社会的・経済的状况が、アメリカの個人主義的政治文化とコミュニティの衰退によって力が剥奪された状態が改善しにくいとするならば、彼らが住む居住区・コミュニティの「社会基盤を編み直す」作業を通じてその種の政治文化を變形するリーダーが必要となつてこよう。新たな民主的リーダーがコミュニティ内部から創発的に生まれてくる基盤を考える場合、マイケル・サンデルの次のような視点は示唆するところが大きい。

私たちの生活をとりまくグローバルなメディアと市場は、境界や帰属を超越した世界へと私たちを誘う。しかし、そういった力を支配する、あるいは少なくともそれらに対抗するために必要な公民的な資源は今でも、場所や物語、記憶や意味、そして出来事やアイデンティティといった、私たちを世界に位置づけ、私たちの生に道徳的な特定性を与えるものの中に見出せる。⁽¹⁰⁶⁾

一般メンバーは、こうした視点を再審する中で訓練や、オーガナイザー、リーダーとの交流を通じて市民の政治的理解力 (political capacity of citizens) を発達させる。彼らが、(1) 現代のアメリカ社会への批判的な視座を発達させ、(2) 社会変化への建設的な関与を増進させ、(3) 複雑に絡み合う争点を把握するための理論的枠組みを学ぶことが期待されるのである。そうした視点からすれば、IAFは民衆が自分たちの集合的な声を見出し、組織化された多数の市民に本来備わっている力を発揮できるように促す教育事業団の性格を色濃く帯びるも⁽¹⁰⁶⁾

のといえよう。

以上のことを、アメリカの未来のためのキャンペーン (Campaign for America's Future¹⁰⁷、一九九六年創設) の共同創設者で著名な経済学者ポール・オスターマンによって要約しておこう。「ワークシヨップやセミナーは、IAFの文化の一要素である。IAFは組織として訓練を非常に重視する。リーダーとオーガナイザーは、これらの機会を通じて多様な学習に触れ、新しいことを学ぶ。このことは色々な意味で有益である。オーガナイザーは、こうした学習を通して仕事の退屈な面と折り合いをつけることができるようになる。大半が無学なリーダーも、それまで経験したことがない有益なものを獲得する。大学レベルのテキストや資料を読み、議論をする。時には、使用している本の著者と対等の立場で意見をやりとりしたりする。こうした経験は、自分たちの能力についての重要なレッスンとなる。自尊心が高められるだけではない。リーダーは、政治的アリーナで実効的に動くことができるようになるのである。彼らは、学歴で判断されればおおよそ不可能と思われるようなやり方で問題点を調べたり、政治家に向き合うことができるようになるのである」¹⁰⁸。

一対一の面談、公職者に対する制度化された「アカウンタビリティの集い」、¹⁰⁹「アカウンタビリティの夕べ」、組織の統合性を維持するための自己の有効性を参加者に開けて自己再審する「評価の集い」、¹¹⁰会員間で繰り広げられるハウスミーティングなどのプラクティスが多重に組み込まれた相互学習に基づく「学びの共同体」は、先述した組織編制、すなわち命令・権威関係を内包した権威階梯¹¹¹を組織運営の柱とすることによって、より幅広い参加に基づく「関係的なコミュニティ組織化」を通じて政治的パワーの根本問題に取り組むことを可能としたのである。

(三)「形成的な政治文化」の身体化

地域共同体での市民的協働を図る能力を重視する公共的市民論は、マイケル・サンデルやアミタイ・エチオーニなどいわゆる共同体主義者が重視するばかりではなく、一九六〇年代にはインナーシティ論において、また、八〇年代以降はブラック・エンパワーメント論でも注視されてきた。

テキサスIAFは、学校文化の変革の目的と方法を示すガイドブック『テキサスIAF公立学校ビジョン(The Texas IAF Vision for Public Schools)』を一九九〇年六月に発表している。その内容をシャーリーによって整理すれば、以下の五点となる。(1) テキサスIAFの政治的理念と目標が聖書的価値の重視、共和主義の伝統に根ざしている点、(2) 聖書に由来する憐み・連帯が表出する場としての民主主義の継続的な発展を志向する点、(3) 初期米国デモクラットにみられた公共的教育と多元主義を重視する点、(4) 家族の解体、暴力、マリファナ濫用など、若者に深刻な社会的問題への現実的な対応を訴える点、(5) 教育の危機的状况から抜け出すことを目指す点。⁽¹⁰⁾

サンデルが指摘するように、COPSの訓練を受けたリーダーは、「地位のある政治家や運動家ではなく、学校のPTAや教会の役員会といった共同体を支える施設において働いてきた人々」であり、またその多くは女性である。⁽¹¹⁾ 彼女らは、「生活の大部分を教区と自分の子どものために捧げている」。COPSにできることは、「彼女たちが公共生活と公共的な視野を持つように教育し、必要な手段を提供することによって、政治過程への参加を実現することである」。⁽¹²⁾

コレテスも、女性が地域社会に対してこれまで貢献してきた事実をことのほか重視する。普通の人々、特に女性が担い手となる社会基盤が、活気に満ちた民主的文化になくしてはならない「心の習慣」と実践を「政治性」に

つなげるものと考えたのである。そうした参加回路がなければ、「我々は、消費主義や個人主義の言葉を容易に盗む自分のことに夢中ナルシズムに陥ってしまう」⁽¹³⁾とコルテスは述べている。

先に何度も言及した、TMOの設立者であり、コルテスの右腕でもあるステイブンス女史は、コルテスから権力や政治、公共政策や哲学について多くのことを学んだ。彼女は、「私は、個人的な意味では、関係性の権力が分かっていたと思います。その点は、皆さんも家族の中で学んでいます。皆さんは一人では存在できないのです」。そして、こうした認識が「政治性」との関係で重要であると気づいたのは、「この組織に入った時です」⁽¹⁴⁾と言っている。IAFのオーガナイザーやリーダーになるためには、「積極的に関係性に取り組まなければなりません。自分をいつもアクターと見る必要があり、決して受動的な人間と見てはなりません」⁽¹⁵⁾というのが彼女の理解である。

コルテスらにとって、家族と政治、個人と政治は密接に関連するものであった。先に触れたウィリアム・グレイダーは、人々に自分たちよりも広い文脈で考えるように求めるIAFの政治活動の神学は、家族と政治を次のように捉えていると述べている。「現代の家族生活を破壊するもの多くは、大きな政治的領域で決定される事柄から生ずるからである。社会生活の中でアメリカ人を脅かす孤立化は、実は、またアメリカ政治の土台を掘り崩す疎外と大きく異なるものではない」と。アメリカ人は、最終的に悪化した政治的關係に対決することなく破壊された個人間の關係を修復することはできない、との認識を示すコルテスは、グレイダーに次のように語っている。「我々がやるうとしてしていることは、人々を、個人的な苦痛から、シニシズムと消極的態度から引き出して、集団的活動の中で他の人々と結びつけることだ」⁽¹⁶⁾と。

コルテスは、家族の中で生き残るのと全く同じく、「政治の中で生き残るのも関係性の権力に依存している」

と繰り返して述べている。彼は、筆者とのインタビューで次のように述べている。「我々の組織は、家族に取って代わることはできません。家族が、親子、兄弟にしなければならないことを、我々の組織の中でお互いではできないでしょう。でも、家族のメンバーではない組織のメンバー仲間の間にかにして信頼を育て上げるか。これは相互に学び合うことができるでしょう。信頼は、お互いに誠実かつアカウンタブルになることを学ぶことから生まれるのです」⁽¹¹⁷⁾。

チェンバースも、「力と愛を原動力とすることによって完全な人格になる」と述べたことは既に紹介した。「愛は存在することを必要とされるが、力は行動することを必要とする。我々は、我々の力を権威者然として振る舞う人々に迎合するような形で連中に手渡ししてしまいがちである」⁽¹¹⁸⁾。それ以上に、「我々は権威に迎合するように訓練される。それはまずは親であり、続いて教師である。そして職場の上司、政治家である」。しかし、「我々が成長し、知識も備わり、自分を知るようになると、自らの活動に責任を持ちだし、誰か別の人の力に迎合したり、逆に反対する時はどのような局面かを自ら決めだす。我々の社会は、あらゆる人々の十分な知識に基づく同意に基づくものである」⁽¹¹⁹⁾。

「あるがままの世界——それは力だ。あるべき世界——それは愛だ」⁽¹²⁰⁾という聖書的価値と共和主義の伝統を結合するIAFの「始まりの教育哲学」は、マイケル・サンデルによれば、リベラルなそれとは異なり、形成的な政治、つまり自己統治に必要な特性を市民の中に培う政治を要求する「市民性の政治経済学」⁽¹²¹⁾と称される。そのサンデルは、第二次世界大戦後のアメリカでは、こうした「市民性の政治経済学」が、マクロ経済的課題のクローズアップ、財政政策の勝利とともに、「成長と配分的正義の政治経済学」に取って代わられたと批判する⁽¹²²⁾。

実際、そうした政治経済学の転換は、学校教育のあり方に対しても大きな影響を与えることとなった。戦後ア

メリカの学校改革は、人種統合教育を促した一九五四年のブラウン判決以降、公平を準規として、補償教育（貧困生徒への教育の機会均等を促進する初期教育の大規模な努力であるヘッドスタート計画）や無選抜入学制、クーポン制など種々のアイデア・改革案を提起し、実施してきた。しかし、学校教育の現場には、人種差別、校内の荒廃、高い中退率などの点で、改善の兆しはみられず、批判の矛先は、いい加減な内容のカリキュラム、進路別カリキュラムの無理な編成、詰込み教育などに向けられた。

こうした状況に対処しようと一九七〇年代に始まった「効果的學校」への取り組みは、マイノリティの貧困家庭児童の成績の向上、校長の強い指導性の發揮、基礎スキル向上への全学的な指導、教師の生徒に対する高い期待度を持つ効用などを鍵要素として抽出し、相互の関連性を検討することに力を入れた。⁽¹²³⁾この動きとほぼ踵を合わすように全国的なレベルにおいて基礎学力重視プログラムが喧伝され出した。一九八三年にはレーガン大統領の「教育の卓越性に関する全国諮問委員会」の報告書として、学業の卓越性と国際経済競争力を主張する連邦教育省諮問委員会報告書『危機に立つ国家』⁽¹²⁴⁾が公表され、「優秀さ」と「効率性」が教育改革の中心目標となつて久しい。学校改革に「教育の市場化」のアイデアが組み込まれ、バウチャー制度やチャーター・スクールの採用が目立ちだした。

一連の学校改革で唱道される「成功」の評価基準をテキサスIAFは、「学校の社会化」に置いた。一九八〇年代に主流となった教育スタンダードや試験ベースの学力評価に対してテキサスIAFは、「低所得者地区内、あるいはその周辺でテキサスIAFが取り組んできた、テストの得点に直接には翻訳できない広範囲にわたる健康・安全・住居・雇用問題を忘れ去っている」⁽¹²⁵⁾と批判した。

五 テキサス I A F と「新しい『オールドスタイル』の政治」

(一) 「市民性の政治経済学」と社会資本

「社会福祉」の商品化を基本トーンとした政策の下、一向に変わらない貧困者の生活状態は、親に長時間労働を強い、彼らが中間共同体での活動に割く時間を奪ってきた。衰退する社会基盤と「ギャンブルめいたテスト体制 (high-stakes testing regime)」に縛られる教師の疲弊は、コミュニティと学校との関係を難しいものにしてきた。こうした難局に対応するがごとく I A F は、親の学校への生成・変形型関与を促し、学校をコミュニティの中心部に引き込み、学校の評価基準を変え、公教育に投入される人的・財政的資本を増やそうとしたのである。⁽¹²⁶⁾ 子ども、保護者、近隣住民が、多様な観点、多様な利益の立場からお互いに「市民性の政治経済学」を実践する場として学校を位置づける取り組みが模索されたのである。コミュニティの活性化のための基地としての「学校」をコルテスは、次のように述べている。

この種の共同体を作り出そうとすれば、真の教える・学ぶ文化を育てようとする戦略を練る必要がある。そこには必ず、協働を厭わない親や教師、賃金労働者や地域の他の制度(教会、ユダヤ教会、モスク、寺院)のメンバーに有望なリーダー候補を見出すためにオーガナイザーと一緒に活動しなければならなくなる。親をコミュニティ・リーダーとして育てることは、彼らが学校集団を共に導き、公共医療サービスを利用できる可能性を大きくしたり、学校の教育課程を生徒によりやりがいあるものにする事など、あらゆることに影響を及ぼすことを意味するのです。地域社会の諸制度が学校生活に関与することは、住民間の結束を深め、学校という制度が改善

されることを意味するのです。⁽¹²⁷⁾

テキサス I A F の学校改革は、住民の間に広がる冷笑主義と無関心の悪循環から信頼・連帯・互酬性の好循環へといかにすれば変質できるかという問題に対する一つの道筋を示している。それはまた同時に、都市近隣住区、周縁居住区の低所得層の生徒の学業成績向上への市民的な関心の潜在的な力を開花・発展させる手順をも示している。

ところで、共同体主義者や一部の社会資本論者によって現代政治に不足しているのは、対立ではなく協力・協働であると主張されることがある。しかし、社会資本が提供するものは、協力の単なる代替物ではなく、対立にわたる必要定数であることをデニス・シャリーの提携学校 (A S) 研究は示している。⁽¹²⁸⁾そして、その「社会資本」についてコルテスは、次のように述べている。「社会資本は現在の議論では聞き慣れた用語ではないが、危機の解決や貧困の軽減に我々が既に理解している他の資本と同様に重要である。ハ中略V広い支持基盤を持つ我々の組織は、人間関係のネットワークに埋め込まれた社会資本を建設し、拡大し、かき混ぜる努力をしている」⁽¹²⁹⁾。コルテスは、社会資本の創出に必要なことは、対立と協調のせめぎあう中での妥協に向けての交渉に依存する、と考えたのである。

社会資本論は、宗教組織、近隣住区組織、自発的結社を含む、あるいは福祉国家の官僚制と市場の予測できない変化との間に存在する「市民社会」の重要な媒介ゾーンにおける知の新たな形態を生み出す。⁽¹³⁰⁾バラク・オバマも、「われわれと、コミュニティ——われわれの社会、政治的伝統、知的伝統——との繋がりは、われわれが、このコミュニティを、自然のものではなくわれわれのもの、発見されたものではなく形成されたもの、人間が作っ

てきた多くのもの一つとして捉えるときに、強められ⁽⁸¹⁾、「遠い親戚まで含む家族よりも、もっと大きな集団に力が与えられない以上、個人の成功はその周囲の人間を見捨てることになってしまふ危険性⁽⁸²⁾」があると述べている。

コルテスがいう「人間関係のネットワーク」は、テキサス I A F の場合、既に紹介した幾層にも重なる多様な学習活動、「学びの共同体」によって育まれてきた。オーガナイザーやリーダーの研修は、大半の教師教育コースが指導を改善し、最も複雑な宗教的・政治的ジレンマの束を学習者の眼前に置くものである。I A F の野心的な努力の結果として、教師が出席する大半の専門的な発達プログラムは、参加者の「一般的な関与よりも個人的な関与のより深遠な側面を生かそうとする。テキサス I A F においては、シリアスな研究や知的関与は、オプショナルな余暇ではなく、各組織で進みつつある発展の建設的部分⁽⁸³⁾」であるとシャーリーは述べている。

(二)「新しい政治」と「新しい『オールドスタイル』の政治」

政党はかつて、都市マシーンがそうであったように地元住民（ただし、黒人が含まれることは少ない）を教会、友愛団体、ビジネス団体、専門職クラブなどの地元組織と結びつけていた。しかし、テレビ、マスマーケティング技術の発達などによって、政党はこうした結びつきを失った。様々なメディア戦略を駆使した政治的代表的の永久選挙が常態化し、選挙コンサル、世論調査専門家、大口献金者が政党組織者に取って代わった。

階級交差的な連邦型全国的団体は、シダー・スコッチポルが膨大なデータを基に分析したように衰退した⁽⁸⁴⁾。それに代わって台頭してきたのが、会員の多くがメーリングリストだけに顔を見せる「胴体なき頭」型組織への変質であり、権利主唱型のアドボカシー・グループや小集団の繁茂である⁽⁸⁵⁾。アクティベーション活動が絞る対象は

「招待客」のみであり、一般市民を対象とした草の根的な働きかけは忘却された。「直接的・参加的デモクラシーがかつてなく盛り上がってきた反面、皮肉なことではあるが、街角の普通の市民は、その結果に嫌気が差している」⁽¹³⁶⁾とステイヴン・シアーは指摘している。

このような傾向は、貧困層支援の方法にも観察できる。貧困者エンパワーメント団体はかつて、大きな財団に支援を働きかけることが多々あった。しかし、既に一九六〇年代にはフォード財団は、インナーシティで政治的に活動的な黒人や他の集団が、過度に急進的であると批判し、彼らに対する支援を引き揚げ始めた。他の財団もこれに追随した。⁽¹³⁷⁾多くの財団は、貧困者の自己決定力をエンパワーしようとする政治的な組織化やコミュニティ組織化よりも、社会改良プログラムの支援に乗り出した。その結果、財団は、コミュニティ・オーガナイザーではなく、プロジェクト・ディレクター、プログラム・アドミニストレーター、サービスマニッパを提供者を支援する傾向を強めるようになった。政府も貧困者向けサービスマニッパの供給者になった。その政策意図は、コミュニティ活動や政治活動に携わる集団や運動が、自分たちの努力をプログラム・アドミニストレーターの方に向けることを促すことにあった。

こうして一九六〇年代の「貧困の撲滅」は、九〇年代末には、「貧困の私化」「福祉受給金資格の剥奪」という言葉に取って代わられた。クリントン大統領が、「これまで我々が知っていた社会福祉に終止符を打つ」と宣言して以来、全国レベルで貧困者層へのサービスマニッパが削減され、公的支援受給者が最低限度額未満の賃金の仕事に追いやられ、民主党政権の下、公的セクターの民営化も進んだ。一九八〇年代に著名な社会学者であり社会運動家のリチャード・クロワードとフランシス・フォックス・ピヴェンが批判した状況、すなわち社会サービスマニッパ関連費用への厳しい切込み、個人の権利や給付の再定義が進められるなか、低所得者地域の住民や彼らの組織が公的な

議論に有効に参加することはますます減少したとの指摘は、九〇年代以降の状況にも妥当しよう。¹³⁸⁾

こうした状況と符合して、権利主張型アドボカシー・グループは増えたが、政策をめぐる公的議論への貧困層の参加は減少し、彼らへの支援の仕方は変わった。そうしたなか、主として米南西部を舞台として、「場所の政治を超える幅広い運動」¹³⁹⁾を展開してきたテキサスIAFは、低所得者コミュニティにおける草の根的な民衆動員とリーダーシップ開発をテコに、生活賃金キャンペーンなどの経済的リベラル要素とマイノリティの公職進出など社会的・政治的リベラル要素の結合に取り組んできたことは大いに注目値する。¹⁴⁰⁾

団体が雇うオーガナイザーは地元団体と協働し、コミュニティ・リーダーを選び、彼らのニーズに耳を傾ける。オーガナイザーはコミュニティ・リーダーを訓練し、次の段階では、リーダー自身がIAFの活動目標を明確に意識化できるように彼らから距離をとる。彼らリーダーたちは教区委員会での議論や近隣の人々との会話をこなし、ハウスミーティング、ブロックミーティングの組織化など様々な局面に参画する。ベテランのプロのオーガナイザーは、自分たちの専門的意見をリーダーの関与に民主的に結びつけ、地域を全国のネットワークに関係づけようとした。「関係的パワー」を連邦構造型へと結合するを通じて、一般メンバー間に自分たちの問題は自分たちで解決できるという信念を植え付け、血肉化することを可能としてきたのである。

先述したようにテキサスIAFは、低所得層地域の学校の住民のコミュニティセンターとして再建・強化することを求めた。そこを活動の場として、地域の多数の親、教師、コミュニティ・リーダーが相互に活発な議論を交わし、草の部民主主義を実践してきた。多様な教育活動、学習活動の複雑な網の目が、テキサスIAFの組織化が他の同種の組織と比較して反省的で理論的に洗練されることにつながったのである。

テキサスを中心とした米南西部、カリフォルニア、ニューヨーク、米東海岸を拠点に活動を展開している産業

地域事業団（IAF）は、全国的な、そして最終的には「グローバルな決定作成に影響を与えることに結びつける道」⁽⁴¹⁾を模索している。その実現のためにも各地の支部組織が、より高次な次元で有効に機能する力、民衆自身が政治的決定権を持つ公的世界の担い手になる必要があった。

IAFは政治的に有効なパワーを獲得、保持するために、コミュニティの組織化を十分に行い、それを政治システムに結びつけ、政党が従来發揮していた媒介組織の機能を果たすことによって、マーク・ウォレンの表現を借りれば、「新しい『オールドスタイル』の政治（New “Old Style” Politics）」⁽⁴²⁾を實踐してきたのである。マイケル・サンデルは、この「新しい『オールドスタイル』の政治」に期待を寄せて、次のように述べている。

地域への愛着は、私的な追求を超えた共同生活に市民を引き込むことによって、また公的な事柄に参加する習慣を培うことによって、自己統治に役立つ。トクヴィルの言葉を借りれば、地域への愛着のおかげで、市民は「自分たちの手の届く狭い領域で統治の技術を駆使」できるのである。少なくとも理屈のうえでは、ハ中略V市民的能力は、地域や町役場、教会やシナゴグ、労働組合や社会運動でまず目を覚まし、やがて全国に向けて發揮されるのだ。⁽⁴³⁾

六 結びに代えて

コミュニティ組織化のエンパワーメントについて、ジェフリー・ベリーらが行った、バーミングハム（アラバマ州）、デイトン（オハイオ州）、ポートランド（オレゴン州）、セントポール（ミネソタ州）、サンアントニオの比較研究は、COPSのサンアントニオがその実効性で他の都市より高いことを示している。同時に、市当局へ

の対抗力は居住区人口構成のヒスパニック系の多さに比例し、構成比が高い地域ほどCOPSの活動は活発であり、活動当初は、「アリンズスキー型の対決戦術、後には草の根活動をベースとする政治的な影響力が知られるようになった結果、大半の争点において市議会でも多数派を確保」するまでに政治的力を増進し、また市民的能力（政治的有効感、自己実現、知識）も高いことを観察している。⁽⁴⁴⁾

コミュニティの一体感をベースとした参加と責任を構造化したIAFのような組織が政治に関わるときに生まれる「新しい『オールドスタイル』の政治」を、ハリー・ポイトは「革新的ポピュリズム」と呼んだ。ポイトの説明によれば、オーガナイザーは、「七〇年代から八〇年代にかけて復活したポピュリズムの体現者である。彼らに見られる民主的ポピュリズムは、市民・労組エネルギー連合やシチズン・アクションのネットワークをはるかに超えて成長しつつある。アメリカの近隣を形成する何千という地域団体にも、このポピュリズムは見出すことができる。教会など宗教団体の社会活動に新しい精神を吹き込んだのもポピュリズム」である。⁽⁴⁵⁾

アメリカで最初のポピュリスト政党といわれた人民党（北東部の独占資本化しつつある「泥棒貴族」への反発を強める中西部の農本主義的運動をベースに一八九一年に設立。比較的短命に終わる）の指導者やキング牧師といった進歩的ポピュリストの伝統を受け継ぐ民衆指導者たちの表現では、「アメリカンドリームとは、分かち合う夢のことであった」とポイトは述べ、さらに次のように続ける。

アメリカは、「協同福祉国家」^{コモンウェルス}だと考えられていた。私有財産それ自体は、決して目的ではなかった。ベンジャミン・フランクリンが書いたように、財産は単なる「社会の隷属物」であって、財産を所有する人間は、全体の福利のための管財人として行動する重大な義務を負っているとされていた。△中略▽革新的ポピュリズムは、

私たち国民の「共有財産」という意識を再構築しようとする。革新的ポピュリズムは、大企業の利己主義に挑戦する。アメリカの国内産業は近代化を必要とし、我々のコミュニティも投資による再活性化を必要としている。このような時に大企業は、貴重な資金を投機や企業買収、海外投資に浪費しているのである。⁽¹⁴⁷⁾

IAFがポピュリズム的だという場合、エリート不信、反税、性的嗜好への道徳的反感などに訴える右派ポピュリストとは異なる。後者の反政治的運動はIAFとは方向性を逆にし、「規範的制約と民主的に樹立された権威の内部構造」⁽¹⁴⁸⁾を欠く傾向にある。ボイトが参照するCOPSのような草の根活動を基盤とした革新的ポピュリズムは、自己教育を伴わない自己主張を繰り返す反知性主義的なポピュリズムとは別物であり、その対極にあるといつて過言ではないであろう。

マイケル・サンデルは、IAFなどのコミュニティに基盤を置く組織は、米国民の民主的生活を再び元気づけ、諸政治制度を働く人々や彼らのコミュニティのニーズや野心に再び結びつけることに対する米国の最善の希望の一つを表すものであると評価し、その思想と行動を次のように論じる。IAFの指導者たちは、公民的保守主義者と同様に、「家族、近隣、そして教会といった中間団体、およびそれらの団体が担う人格形成上の役割の重要性を強調する。しかし、IAFにとっては、それらの組織は政治活動の出発点であり、共同体での生活から得る道徳的な資源を共和主義的な意味における自由の行使に結びつける手段⁽¹⁴⁹⁾でもある」と。

ところでバラク・オバマは、若き時代にシカゴで展開したオーガナイザーの仕事から得た教訓を次のように述べている。

言葉と行動を一致させ、心からの願いと実行可能な計画を一致させること。結局のところ、これこそが自尊心の源になるのではないか？私はそう考えて、オーガナイズの仕事を始めたのだ。そしてその考えを辿って行く、私にとつての人種や文化の純粹さを追求することが自尊心の源にならないと同じように、もはやそれは一般のアフリカ系アメリカ人の自尊心の源にもならない、という結論に達するのである。⁽¹⁵⁾

コルテスは、オバマがいう純粹さの追求がもたらす「敵対を交渉に、パワー・ポリティックスを共同体的な政治的言説」に、「人種や文化の純粹さを追求する」「人種的に同質的な宗教団体を多人種的な地元系列組織に、広い民衆参加を中央の権威に結合する」ことが重要だと主張する。IAFが一貫してこだわってきたコミュニティを基盤とした組織化、そして組織内部での権威Ⅱ参加が紡ぎ出すアカウンタブルな関係のパワーを連邦構造的に組織化することこそ、「普通の市民や納税者が、彼らのコミュニティにおいて権力と政治の関係を再編しうる能力と自信を築き」⁽¹⁶⁾、「自尊心」を高め、民衆の政治的なエンパワーメントを促進するのである。

「普通の人々が自分自身の専門家となり、複雑な複数の争点を理解し、自己利益の理解を進める能力」⁽¹⁷⁾をコルテスは市民的政治文化と形容した。家族、教会、コミュニティを基盤に育成されるこうした市民的政治文化がIAFのリーダーを再生産してゆく。メアリー・ロジャーズの表現によれば、彼らは、「政治的右派——イデオロギーによる理性や常識の打倒——に、あるいは政治的左派——その神聖な犯すべからず制度が明瞭な思考や決定的な行動を阻害してきた——に屈してこなかった人々であり」⁽¹⁸⁾、また「政治家やメディア、企業や労働指導者によって容易に取り込まれたり、ミスリードされない人々である」⁽¹⁹⁾。そうした人々をロジャーズは次のように描いている。

「あるべき世界」のビジョンを抱いているが、「現実の世界」の中で働いてきた。彼らは政治的な現実を理解しているのである。さらに重要なのは、彼らは現実と政治的夢想の違いも知っているように思えたことである。彼らは、正しいことと有効なことの違いを学んでいたし、有効であることを選択することが、時にはより賢い選択であることを学んでいた。彼らは、教会の人々の多くが善行 (goodness) と呼ぶものを不屈の精神をもって達成しなければならないことを学んだのである。サークルによつては、彼らの不屈さが彼らの神に悪名を与えることを学んだ。しかし、彼らは、不屈さと善行は魅力のある組み合わせでありうること——特に両者が、数の強さ、知識の力、目標の明確さ、確信の勇氣から動くときには——もまた学んだ。⁽¹⁶⁴⁾

こうした市民的能力をベースとした「新しい『オールドスタイル』の政治」を具現しようとするIAFは、「自発する民主主義」を構想する「哲学する市民」⁽¹⁶⁵⁾に豊かな示唆を与えてくれるものと考ええる。

第二次世界大戦後、米連邦政府が、経済成長と福祉国家の拡充に大きな役割を果たし、今日でも自由、平等、人権の保障に不可欠な存在であることに変わりはない。しかし、二一世紀の政治は、クリントン政権時の労働長官、ロバート・B・ライシュがいう「ニューエコノミー」⁽¹⁶⁶⁾以降に広がる「深淵」、あるいはハーバード大学の歴史学者、チャールズ・S・メイヤーがいう「民主主義の道德的危機」⁽¹⁶⁷⁾が深まるなか、進行する新たな社会的亀裂、新たな「飛び地」的ライフスタイル、サイバー・ポリティクスへの不可逆的昂進によつて今まで以上に断片化、多文化、流動化を余儀なくされてきた。「分断」が囁かれる現代アメリカ政治は、新旧の公的争点のたえざる再定義化を前に、従来の選挙政治、政党政治、利益媒介政治は苦境に陥っている。それはなにもトランプ政権の誕生・混乱をいつているわけではない。

「民主主義の死に方」⁽¹⁸⁾ が語られるなか、責任と応答性の高い自立的な民主的統治を領域や場所に根を張る「社会基盤」をベースにいかにも実現できるのか。IAF、なかならずテキサスIAFの実践に見られるように、一つの答えは、「学びの共同体」を通じての市民の政治への積極的関与、政治的平等、連帯・信頼・寛容、創造的妥協の技術を特徴とする市民共同体の創出あるいは再生にあることは間違いない。

注

- (1) アリンスキーに関する邦語文献には、石神圭子「アメリカにおけるコミュニティの組織化運動——ソール・アリンスキーの思想と実践 (1)(2)(3)(4)」『北大法学論集』第六五巻第一号(二〇一四年五月) 一三三—一五六頁、第六五巻第三号(二〇一九年九月) 一九〇—二五八頁(二〇一四年一月) 二一八—二八四頁、第六五巻第六号(二〇一五年三月) 五三八—五七二頁がある。バック・オブ・ザ・ヤードス近隣地区会議 (Back of the Yards Neighborhood Council) について Robert A. Slayton, *Back of the Yards: The Making of a Local Democracy*, Chicago, Ill.: The University of Chicago Press, 1986 に詳し。
- (2) Michael R. Williams, *Neighborhood Organizing for Urban School Reform*, New York: Teachers College Press, 1989, p. 140.
- (3) これら諸組織とアリンスキーの組織化の戦術・目標・イデオロギーについては Joan E. Lancourt, *Confront or Concede: The Alinsky Citizen-Action Organizations*, Lexington, MA: Lexington Books, 1979 を参照。
- (4) Saul Alinsky, "Tactics for the Seventies," in Marion K. Sanders, *The Professional Radical: Conversations with Saul Alinsky*, New York: Perennial Library, 1965, pp. 68-69.
- (5) Williams, *Neighborhood Organizing, op. cit.*, p. 139.

- (6) 拙稿「産業地域事業団 (IAF) の思想と行動——アリンスキーとその後」『神戸学院法学』第四七巻第二・三号、二〇一八年三月、八五頁。
- (7) 参照、拙稿「コミュニティ関与と学校改革の政治学——戦後アメリカにおける二つの事例紹介を中心として」『甲南法学』第五〇巻第四号、二〇一〇年、一四二頁。
- (8) Samuel G. Freedman, “Ed Chambers: Community Organizing’s Unforgiving Hero,” *New Yorker*, May 6, 2015.
- (9) Edward T. Chambers, *Organizing for Family and Congregation*, Huntington, NY: Industrial Areas Foundation, 1978, p. 6.
- (10) David Moberg, “Chicago’s Organizers Learn the Lesson of CAP,” *Working Paper for a New Society*, 5, Summer 1977, p. 18.
- (11) ケネディ、ジョンソン時代に労働事務次官補として「貧困との戦い」で社会福祉政策を主導したダニエル・P・モイニハンは、「社会的急進主義は市民サービスを要求することではなく」というアリンスキーの主張を誰も非難できなうとして、彼の組織化プログラムの短期的な有効性は認めるものの、長期的なそれについては評価を留保している (Daniel P. Moynihan, *Maximum Feasible Misunderstanding: Community Action in the War on Poverty*, New York: The Free Press, 1969, pp. 187-188.)。 「不満の古傷を擦りむけるは(ラ)ウする (rub raw the sores of discontent)」とどう表現は、アリンスキーの戦術を高く評価したジャーナリスト、チャールズ・E・シルバーマンのものである (Moynihan, *ibid.*, p. 127 から引用)。
- (12) Mary Beth Rogers, *Cold Anger: A Story of Faith and Power Politics*, Denton, TX: University of North Texas Press, 1990, p. 57.
- (13) Ronald Arias, “The Barrio,” in Ed Ludwig and James Santibañez, eds., *The Chicanos: Mexican American Voices*, Baltimore, MD: Penguin Books, 1971, p. 124. これら五州にユタ州、ソノラ砂漠、チワワ州 (メキシコ) の一部を含む

地域は、大南西部 (Greater Southwest) と呼ばれ、「辺鄙、孤立、広大な土地、少ない人口、乾燥、広く散らばる水源、主要な経済的な魅力の欠如」を一般的特徴とする。南西部の社会基盤の「社会的複合性」といった性格は、こうした生態的特徴の上に立つ「ヒュモン・H・ハリーは述べている (John H. Parry, "Plural Society in the Southwest: A Historical Comment," in Edward H. Spicer and Raymond H. Thompson, eds., *Plural Society in the Southwest*, New York: Interbook, Inc., 1972, pp. 299-320)」。南西部の社会・経済的環境については、大著『Leo Grebler, Joan W. Moore, and Ralph C. Guzman, *The Mexican-American People: The Nation's Second Largest Minority*, New York: The Free Press, 1970』の Chapter 3: "The Milieu of the Southwest" に詳しい。南西部を中心にメキシコ系アメリカ人が米国史のそれぞれの段階で占めてきた政治経済的位置を、部分の連続として抽出した『Leobardo F. Estrada, F. Chris García, Reynaldo Flores Macías, and Lionel Maldonado, "Chicanos in the United States: A History of Exploitation and Resistance," *Daedalus*, Vol. 110, No. 2, Spring 1981, pp. 103-131』は、小史ながら、今日の彼らの地位を知る上にも有益である。

- (14) Peter Wiley and Robert Gottlieb, *Empires in the Sun: The Rise of the New American West*, New York: G. P. Putnam's Sons, 1982, p. 271.
- (15) Rogers, *Cold Anger*, *op. cit.*, p. 54. 一九七七年の選挙過程については、Heywood T. Sanders, "Communities Organized for Public Service and Neighborhood Revitalization in San Antonio," in Robert H. Wilson, ed., *Public Policy and Community: Activism and Governance in Texas*, Austin, TX, University of Texas Press, pp. 36-68 に詳しい。
- (16) Rogers, *Cold Anger*, *ibid.*, p. 56.
- (17) Beryl E. Pettus and Randall W. Bland, *Texas Government Today: Structures, Functions, Political Processes*, Homewood, Ill., The Dorsey Press, 1976, p. 60.
- (18) 一九七六年秋に活動を開始したコルテスのイースト・ロサンゼルスでの取り組みについては、Harry C. Boyte, *The Backward Revolution: Understanding the New Citizen Movement*, Philadelphia, PA: Temple University Press, 1980, pp.

65-67に詳し。

- (19) Rogers, *Cold Anger*, *op. cit.*, p. 145. コルテスは、後にリベラをCOPSのコーディネーターに雇い入れた。
- (20) スティーブンスについては、前掲拙稿「産業地域事業団（IAF）の思想と行動」九七一―〇三頁を参照。
- (21) Rogers, *op. cit.*, p. 56.
- (22) *Ibid.*, pp. 147-150.
- (23) Trevor Fishlock, *The State of American*, London: Faber and Faber, 1986, p. 72.
- (24) Rogers, *op. cit.*, p. 97.
- (25) Edward T. Chambers, *Organizing for Family and Congregation*, Huntington, N Y: Industrial Areas Foundation, 1978, p. 12.
- (26) Robert D. Putnam, *Our Kids: The American Dream in Crisis*, New York: Simon & Schuster, 2015, p. 74. [柴内康文訳『われらの子ども——米国における機会格差の拡大』創元社、二〇一七年、八八頁]
- (27) Chambers, *Organizing for Family*, *op. cit.*, p. 3.
- (28) 前掲拙稿「産業地域事業団（IAF）の思想と行動」八七―八八頁。
- (29) Rogers, *op. cit.*, p. 97.
- (30) 参考、Lawrence J. Mosqueda, *Chicanos, Catholicism and Political Ideology*, Lanham, MD: University Press of America, 1986.
- (31) Rogers, *op. cit.*, p. 97.
- (32) データは一九五四年と古いが、M・J・メアリー修道女の調査では、低家賃住宅プロジェクトに住む一一八家族の内の九〇%がカトリックであった。しかし、日曜礼拝を欠かさない人は三八%に過ぎず、教区行事に参加したり、子どもをカトリックの学校にやっている人はほとんどいなかった。M. J. Murray, *A Socio-Cultural Study of 118 Mexican*

Families Living in a Low Rent Housing Project in San Antonio, Texas. Washington, DC: Catholic University of America, 1954, p. 64 以下を参照。

(33) Mosqueda, *Chicanos*, op. cit., p. 158.

(34) Benjamin Marquez, *Constructing Identities in Mexican-American Political Organizations: Choosing Issues, Taking Sides*. Austin: University of Texas Press, 2003, pp. 50-51. レオ・クレブラーらによれば、米南西部のメキシコ系アメリカ人にとってのカトリック教会は、「一九六〇年代以降、「教会への忠誠心や宗教的実践の規範の遵守だけでなく」、彼らの「社会状況の改善に前向きに取り組む教会」に徐々に変化しつつあった (Greber, Moore, and Guzman, *The Mexican-American People*, op. cit., p. 477.)。メキシコ系アメリカ人の宗教と政治活動主義については David L. Leal, “Religion and the Political and Civic Lives of Latinos,” in Alan Wolfe and Ira Katznelson, eds., *Religion and Democracy in the United States: Danger or Opportunity?* Princeton, NJ: Princeton University Press, 2010, pp. 308-352 を参照。

(35) ララサ全国協議会 (NCLA) を率いたヘンリー・サンティステイバンは、メキシコ系アメリカ人が組織化を行う理由として、敵意と無関心を示す支配社会という「外部」環境と、資源が少なく、生存そのものが関心事というバリオの「内部」環境があると述べている (Henry Santestevan, “A Perspective on Mexican-American Organizations,” in Gus Tyler, ed., *Mexican Americans Tomorrow: Educational and Economic Perspectives*. Albuquerque, NM: University of New Mexico Press, 1975, p. 164.)。バリオ政治一般については Benjamin Marquez, *Power and Politics in a Chicano Barrio*. Lanham, MD: University Press of America, 1985 を参照。また、バリオを基礎にしたヒスパニックのコットーニティ組織化については Peter Skerry, *Mexican Americans: The Ambivalent Minority*. New York: The Free Press, 1993, Chapters 5 & 6 が有益である。

(36) チェンバースにリーダーシップの資質を鍛えられたコルテスは、「アリンスキーが嫌いだっだし、彼も私を嫌っていた」と述べている。アリンスキーを「仰々しい自己中心主義、人の話を聞かない性格、忠誠者をも寄せつけない

性格」の持ち主と感じていたコルテスであったが、その彼もアリンスキー・モデルを模倣することから活動に入った。アリンスキーが教会を手段視したとすれば、コルテスは教会そのものを重視した。カトリックの彼であったが、数多くのプロテスタント神学者、ニーバー、テイリツヒ以外にも、米国の自由主義神学者でドイツのルーテル派教会の牧師・神学者のデイトトリヒ・ボンヘファー（一九〇六一一九四五）、ドイツの新約聖書学者のルドルフ・カール・ブルトマン（一八八四—一九七六）らの書物を読み返し、信仰と社会変動の関係について考察を深めていった（Warren, *Dry Bones Rattling*, *op. cit.*, p. 58.）。

(37) Warren, *ibid.*, pp. 48-50.

(38) COPSに似た「信仰に基づく組織化」は、全米規模で地方組織と協働している太平洋コミュニティ・オーガニゼーション協会（PICO）、ガマリエル基金、直接行動リサーチ研修所（DART）などがある（以下、参照）。

Richard L. Wood, *Faith in Action: Religion, Race, and Democratic Organizing in America*, Chicago, Ill.: The University of Chicago Press, 2002. Richard L. Wood and Brad R. Fulton, *A Shared Future: Faith-Based Organizing for Racial Equity and Ethical Democracy*, Chicago, Ill.: The University of Chicago Press, 2015. インターフェイス・ファウンデーズ調査によれば、これらのネットワークは二二三の団体を組織し、会員会衆、その他の機関約四千を含む。これら団体全体で約二千七百名が理事会で活動し、二万四千名が各活動の作業部会に定期的に参加し、約十万人が市民活動に参加している。カトリックや主流プロテスタント、黒人プロテスタントが多く代表されている。ユダヤ教派は会員の約二％程度で、黒人のいくつかの福音派グループも同程度いるが、白人の福音主義者はほとんどいない（Warren, *ibid.*, p. 8.）。

(39) Stanley D. Brunn, *Geography and Politics in America*, New York: Harper & Row, 1974, pp. 238.

(40) Dennis Shirley, *Community Organizing for Urban School Reform*, Austin, TX: University of Texas Press, 1997, pp. 255-256.

(41) Rogers, *Cold Anger*, *op. cit.*, p. 107.

- (42) James T. Kloppenberg, *Reading Obama: Dreams, Hope, and the American Political Tradition*, Princeton, NJ: Princeton University Press, 2011, pp. 29-30. 「古矢旬・中野勝郎訳『オバマを読む』岩波書店、二〇一二年、六四頁」
- (43) Warren, *Dry Bones Rattling: op. cit.*, p. 68.
- (44) *Ibid.*, p. 51. 「住宅の神学」は、マーク・ウォレンによるビアトリス・コルテスへのインタビュー「一九九三年七月二二日、於・サンアントニオ」の中での表現 (*ibid.*, pp. 58, 278)。
- (45) William Greider, *Who Will Tell the People: The Betrayal of American Democracy*, New York: Simon & Schuster, 1992, p. 226. 「中島健訳『アメリカ民主主義の裏切り』青土社、一九九四年、二九八頁」
- (46) Warren, *Dry Bones Rattling: op. cit.*, 69-70. ロバート・パットナムらは、南西部には「カトリックとラティーンの双方が集中しており」、そのカトリック信仰は、「政治的スペクトラムの全域にわたって最も肯定的に捉えられる宗教に数えられている」と述べている。そして米国は、「宗教的献身と多様性、そして寛容性を結びつけてきたが、それは宗教の異なる——あるいはまったく宗教を持たない——アメリカ人が、学校、近隣地域、職場、そして家族の内部で互いの中で平和裏に共存しているからである」と述べている (Robert D. Putnam and David E. Campbell, *American Grace: How Religion Divides and Unites Us*, New York: Simon & Schuster, 2010, pp. 579-580. 「柴内康文訳『アメリカの恩寵——宗教は社会をいかに分かち、結びつけるのか』柏書房、二〇一九年、二六八、五七二―五七三頁)。
- (47) William Julius Wilson, *The Bridge over the Racial Divide: Rising Inequality and Coalition Politics*, Berkeley, CA: University of California Press, 1999, p. 86.
- (48) *Ibid.*, p. 87.
- (49) Michael J. Sandel, *Democracy's Discontent: America in Search of a Public Philosophy*, Cambridge, MA: Harvard University Press, 1996, p. 337. 「小林正弥監訳『民主政の不満——公共哲学を求めるアメリカ(下)』勁草書房、二〇一一年、二七二頁」

- (50) Barack Obama, *The Audacity of Hope: Thoughts on Reclaiming the American Dream*, New York: Crown Publishers, 2006, p. 262. 「棚橋志行訳『合衆国再生——大いなる希望を抱いて』ダイヤモンド社、二〇〇七年、二九四—二九五頁」
- (51) Sandel, *Democracy's Discontent*, op. cit., p. 337. 「前掲訳書『民主政の不満』二七一頁」
- (52) Wilson, *The Bridge over the Racial Divide*, op. cit., p. 86.
- (53) Shirley, *Community Organizing*, op. cit., p. 45.
- (54) *Ibid.*, p. 45.
- (55) Stephen Hart, *Cultural Dilemmas of Progressive Politics: Study of Engagement among Grassroots Activists*, Chicago: The University of Chicago Press, 2001, p. 47.
- (56) Warren, *Dry Bones Dry*, op. cit., pp. 23-24.
- (57) <http://www.businessdictionary.com/definition/social-fabric.html>
- (58) Rogers, *Cold Anger*, op. cit., p. 96.
- (59) Edward T. Chambers, *The Power of Rational Action*, Chicago, Ill.: ACTA Publications, 2009. チェンバースは、1 AFへの五五年間に及ぶ活動を総括したパンフレット『活動が公共生活を創造する』(*Action Creates Public Life*)の最後の段落で、組織とパワー、公共生活における活動について、次のような十の原則を示している。(1) 我々は人間であるがゆえに活動する。人間は活動を引き起こす。(2) 我々は成功するためにお互いを必要とする。だから共に活動するのである。我々は関係的な存在である。(3) あらゆる活動はなんらかの避けがたい反応を引き起こす。我々はその反応を次の活動のために利用する。(4) 権力者が最も恐れることが二つある。それは、組織化された人々と組織化されたお金である。この二つを合わせて初めて現実的なパワーを持つことができる。(5) 身体にとって酸素が不可欠なように、活動にとっては組織が不可欠である。両者は、それらなくしては生存できない。(6) 「関係的

活動」——二人の人間が共に活動に入るかどうかを決めようとする場合に、彼らの間での一対一の面談——は、人間が持つ最強の武器である。(7)「我思うゆえに我あり」ではない。むしろ「我活動するゆえに我あり」である。(8)多様性が活動を創造する。それゆえに、我々が活動する時、何が起ころうとしているか分からない。それは他者、世界、そして自分自身に依存する。(9)男女を問わず全ての人は、認識された自己利益で活動する。(10)我々は、公生活に十全に参加し、十全に人間的になるために活動する必要がある (Edward T. Chambers, *Action Creates Public Life*, Chicago: ACTA Publications, 2010, pp. 34-35.)。

(60) E. E. Schattschneider, *The Semisovereign People: A Realist's View of Democracy in America*, New York: Holt, Rinehart and Winston, 1960, p. 37. 「内山秀夫訳『半主権人民』而立書房、一九七二年、五三頁」

(61) Ernesto Cortes, Jr., "Reweaving the Fabric: The Iron Rule and the IAF Strategy for Power and Politics," in Henry G. Cisneros, ed., *Intervenor Destinies: Cities and the Nation*, New York: W. W. Norton, 1993, p. 299.

(62) Cortes, "Organizing the Community," *op. cit.*, p. 13.

(63) Ernesto Cortes, Jr., "What about Organizing?" in Joshua Cohen and Joel Rogers, eds., *The New Inequality: Creating Solutions for Poor America*, Boston, MA: Beacon Press, 1999, p. 71.

(64) コルテスの「合意の政治」については、前掲拙稿「産業地域事業団 (IAF) の思想と行動」九八—九九頁を参照。

(65) 筆者とのインタビュー「二〇一二年三月二五日、於・The Inn at Harvard (Cambridge: MA)」。ウィリアム・グレイターは、メンバーの個人的経験をベースに根差す対話は、「相手を敬い、内容は具体的で、自己批判的、高い精神性を漂わすが、分別を弁え、自制心が効いたものである」と述べている (William Greider, *Come Home, America: The Rise and Fall (and Redeeming Promise) of Our Country*, New York: Rodale, 2009, p. 271.)。

(66) Kloppenberg, *Reading Obama, op. cit.*, p. 28. 「前掲訳書」六三頁

- (67) Chambers, *The Power of Relational Action*, *op. cit.*
- (68) 拙稿「産業地域事業団（IAF）のプログレッシブ・ポリティックス——アメリカにおける草の根民主主義の実践に向けて」『阪大法学』第六一巻第三・四号、二〇一一年、五〇頁。
- (69) Warren, *Dry Bones Rattling*, *op. cit.*, p. 51.
- (70) Rogers, *Cold Anger*, *op. cit.*, pp. 194-195.
- (71) Warren, *op. cit.*, p. 68.
- (72) Chandler Davidson, *Race and Class in Texas Politics*, Princeton, NJ: Princeton University Press, 1990, p. 255.
- (73) Warren, *op. cit.*, p. 7 & pp. 51-52.
- (74) *Ibid.*, Chapter 2.
- (75) George Packer, *The Unwinding: An Inner History of the New America*, New York: Farrar, Straus and Giroux, 2013, p. 232. 「須川綾子訳『滅びゆくアメリカ——歴史の転換点に生きる人々の物語』NHK出版、二〇一四年、三三六〇頁」
- (76) Cortes, “What about Organizing?” *op. cit.*, pp. 70-71.
- (77) Harry C. Boyle, Heather Booth, and Steve Max, *Citizen Action and the New American Populism*, Philadelphia, PA: Temple University Press, 1986, p. 165. 「野村かこ子・水口哲訳『アメリカン・ポピュリズム』亜紀書房、一九九三年、二八八頁」
- (78) Cortes, “Reweaving the Fabric,” *op. cit.*, p. 295 & pp. 305-307.
- (79) 前掲拙稿「コミュニティ関与と学校改革の政治学」一三三頁。
- (80) Shitler, *Community Organizing*, *op. cit.*, p. 59. *AS*については、前掲拙稿「コミュニティ関与と学校改革の政治学」一七―三二頁を参照。
- (81) Shitler, *ibid.*, pp. 291-294. 拙稿「アメリカ都市部における学校改革の政治学——『市民能力と都市教育プロジェクト

- クト』『阪大法学』第五三卷第三・四号、二〇〇二年、五九一七六頁も参照。
- (82) Shirley, *ibid.*, p. 73.
- (83) Dennis Shirley, *Valley Interface and School Reform: Organizing for Power in South Texas*, Austin, TX: University of Texas Press, 2002.
- (84) Shirley, *Community Organizing*, op. cit., p. 73.
- (85) 前掲拙稿「コミュニティ関与と学校改革の政治学」二九一三〇頁、前掲拙稿「アメリカ大都市部における学校改革の政治学」二九一三〇頁。
- (86) Shirley, *Community Organizing*, op. cit., p. 164.
- (87) *Ibid.*, p. 198. 前掲拙稿「コミュニティ関与と学校改革の政治学」二五一二八頁も参照。
- (88) Shirley, *Community Organizing*, *ibid.*, p. 9.
- (89) *Ibid.*, p. 33.
- (90) *Ibid.*, p. 277.
- (91) ASが採用するコミュニティ関与、政治的エンパワーメント戦略を、周りの住民のコミュニティ意識・組織が強くないマグネットスクールで実施することは(不可能でないかもしれないが)非常に難しい可能性があった(*ibid.*, p. 277.)。
- (92) *Ibid.*, pp. 32-34.
- (93) *Ibid.*, pp. 76-91.
- (94) *Ibid.*, pp. 86-89.
- (95) *Ibid.*, p. 89. ちなみに一九九〇年から二〇〇九年の約二〇年間のゲストスピーカーは以下の通りである(I A F Seminar Guests 1990-2009)。
ヘンリー・アロン、ジェフリー・アブラハム、デイヴィッド・ベーコン、メアリー・

J・ベイン、ベンジャミン・バーバー、ロナルド・ベイナー、ドン・ベンジャミン、リチャード・バーンスタイン、
 バリー・ブルーストン、ヴァーノン・ブリッグス、アラン・プリンクリー、ウォルター・ブルウゲマン、マーティン・
 カーノイ、ホルヘ・カステネーダ、マーヴィン・シャニー、ジョン・コップ、ロマンド・コールズ、ジェームズ・コー
 ン、アルベルト・コレテス、バーナード・クリク、チャールズ・カラン、マイケル・ドーソン、レイヴァ・ダービー、
 エリオット・ドーフ、トーマス・エドソール、リチャード・エルモア、デイヴィッド・エルウッド、アラン・エンソ
 ヴェン、ロナルド・ファーガソン、トーマス・ファーガソン、クレイグ・フォスター、リチャード・フォックス、エ
 リザベス・フォックス・ジェノヴェーゼ、ロバート・フランク、リチャード・フリーマン、ジェームズ・ガルブレイ
 ス、デイヴィッド・ガーゲン、ノーム・グリックマン、ラリー・グッドウイン、デヴィッド・グリーン、ロバート・
 グリーンスタイン、ウイリアム・グライダ、ナイルズ・ハンセン、ベネット・ハリソン、トーマス・ハッチ、スタ
 ンリー・ハワーワズ、デイヴィッド・ヘイズ・パティスタ、ブライアン・ヘアー、デイヴィッド・ホーンベック、モ
 リー・アイヴィンス、ジャクリーヌ・ジョーンズ、ダレゴリー・L・ジョーンズ、ジュデイス・ジョン、ロバート・
 ケイン、マイケル・ケイジン、メアリー・ケリー、ロバート・カトナー、ジャック・ラングート、ディック・ラーヴィ
 ン、ニコラス・レーマン、ヘンリー・レヴィン、フランク・レヴィ、ステイブ・レヴィ、ネルソン・リヒテンス
 タイン、マイケル・リンド、チャールズ・リンドブルム、ジョン・リンスキンス、ロバート・リントイカム、グレン・
 ラウリー、ロビン・ロヴィーン、エヴァ・ルーマス、ジェーン・マンズブリッジ、アン・マークセン、テオドール・
 マーモア、レイ・マーシャル、スコット・マカウン、ステイブ・マクドナルド、デボラ・メイヤー、ラリー・ミ
 シェル、テリー・モア、ジェームズ・モローネ、ボブ・モーリス、メアリー・J・マーン、リチャード・マーン、
 ダウエル・マイヤーズ、キャサリン・ニューマン、ジェニー・オクス、メルヴィン・オリヴァー、ポール・オス
 ターマン、チャールズ・ベイン、ウエイン・ピアース、マイケル・J・ピオリ、ラリー・ラスムッセン、ローレン・
 レズニック、ジョエル・ロジャーズ、メアリー・ベス・ロジャーズ、リチャード・ローティ、セイモア・サラソン、

フィリップ・シュレクティ、ウイリアム・シュナイダー、ジュリエット・シヨアー、ロバート・シユライター、デニス・シャーリー、アーリーン・スコルニック、ロジャー・ソーダー、ジェフリー・スタウト、ウイリアム・サリヴァン、ジュディス・テンドラー、ジェームズ・トービン、ステイーブン・トゥールミン、デイヴィッド・トレイシー、マイケル・ウォルツァー、デイブ・ワーナー、ロバート・ウエストブルック、ロナルド・ホワイト、ドローレス・ウイリアムズ、ジェームズ・Q・ウィルソン、ロバート・ウィルソン、ウイリアム・J・ウィルソン、ピーター・ウィット、アラン・ウォルフ、ジョン・ウーマック、ポール・ウッドラフ、ヤング・プリユエル・エリザベス、ジョニー・レイ・ヤングブラッド。

では、セミナーではどのようなテーマが講じられていたのでしょうか。オバマ大統領を生んだ大統領選挙の年、二〇〇八年に限って見ておこう。フランク・レヴィイ（MIT教授・都市経済学）「二〇世紀アメリカにおける不平等と制度」（テキサス州オースティン、一月二八―二九日）、アン・ダンケルベルガー（公共政策ブライオリティーズセンター副部長）ほか「医療改革」（テキサス州オースティン、三月二八―二九日）、ラヴェイ・ダービー（マリン郡コロシヨファー上級ラビ）「保守派ユダヤ主義を知るための一〇一の問答」（アリゾナ州フェニックス、四月一―二日）、ポール・ウッドラフ（テキサス大学オースティン校古典学教授）「劇場の必要性——観ることと観られることの芸術」（テキサス州オースティン、六月一日）、グレン・ラウリー（ボストン大学社会科学・経済学教授）「アメリカにおける神の受肉」（ルイジアナ州ニューオリンズ、六月一〇―一二日）、ロマンド・コールズ（デューク大学政治学教授）、スタンリー・ハワーズ（デューク大学法倫理学教授）「キリスト教、民主主義、ラディカルな普通の人々」（アリゾナ州フェニックス、九月二―三―三日）、エリオット・ドーフ（ユダヤ教・ラビ研究大学ラビ）説教（アリゾナ州フェニックス、九月二―四日）、ロナルド・ホワイト（カリフォルニア大学ロサンゼルス校歴史学教授）「リンカーン」（アリゾナ州フェニックス、一〇月二―三―四日）。

(96) Shirley, *Community Organizing*, op. cit., pp. 89-91.

(97) この点について、セミナーの講師も務めた米国のジャーナリスト、ウィリアム・グレイダーは、次のように述べている。コルテスは、「活動だけでなく思想のためにも生きていて——恐ろしいほどの幅の（歴史・経済・哲学・政治）の書物を貪り読む政治の世界には稀なタイプの人物である」（William Greider, *Who Will Tell the People: The Betrayal of American Democracy*, New York: Simon & Schuster, 1992, p. 228. 「中島健訳『アメリカ民主主義の裏切り』青土社、一九九四年、三〇二頁」。筆者も、テキサス州オースティンにあるIAF南西部事務所の個人蔵書量には驚愕した思い出がある。

(98) 例えば、二〇一七年に死去したアーバン・トランスフォーメーション・パトナーズ創設者であり米国長老会牧師のロバート・リンティカムも、一九八八年に一〇日間研修コースに参加し、コルテスの指導を直接受けた。全米・世界でコミュニティー組織化を展開する彼は、「関係的権力の神学と実践」の「四人の父」の一人にコルテスを挙げてゐる。参照：Robert C. Linthicum, *Transforming Power: Biblical Strategies for Making a Difference in Your Community*, Downers Grove, Ill.: Inter Varsity Press, 2003.

(99) Rogers, *Cold Anger*, *op. cit.*, p. 38.

(100) *Ibid.*, p. 44.

(101) Shiley, *Community Organizing*, *op. cit.*, p. 34.

(102) Rogers, *op. cit.*, p. 95.

(103) Ernesto Cortes, Jr., *Rebuilding Our Institutions*, Chicago: ACTA Publications, 2010, pp. 6-7.

(104) Sheldon S. Wolin, *The Presence of the Past: Essays on the State and the Constitution*, Baltimore, MD: The Johns Hopkins University Press, 1989, p. 139. 「千葉真・斎藤真・山岡龍一・木部尚志訳『アメリカ憲法の呪縛』みすず書房、二〇〇六年、一八三頁」

(105) Sandel, *Democracy's Discontent*, *op. cit.*, p. 349. 「前掲訳書、二八五頁」

- (106) Jim Rooney, *Organizing the South Bronx*. Albany, NY: State University of New York Press, 1995, p. 12. 以下を参照された。Ernesto Cortes, “Education for Citizenship: A Profile,” in Harry C. Boyte and Frank Riessman, eds., *The New Populism: The Politics of Empowerment*, Philadelphia, PA: Temple University Press, 1986, pp. 119-125.
- (107) Paul Osterman, *Gathering Power: The Future of Progressive Politics in America*, Boston: Beacon Press, 2003, p. 60.
- (108) Rogers, *Cold Anger*, *op. cit.*, pp. 27-28, 30-31.
- (109) ウォルター・リップマンの以下の文章に権威が階梯化された「学びの共同体」の勁さが直截に表現されている。「世論の代表者とされる人の発言よりも一つの集団の判断の力の方がふつうには一貫性があり、またしばしば形式により忠実なのはなぜか、という理由を説明するために集団的知能などというものを発明する必要はないのである。一つの頭脳、もしくは二、三人の頭脳は一連の指向を担うことができるが、一致して何かを考えようとする集団は賛成か反対かというより以上のことはあまりできない。階層制をつくっている人たちは集団の伝統をもつことができる。徒弟として親方から仕事を学ぶ。その親方は自分の徒弟のころにそれを学んだ。そして永続する社会ではどこでも、支配的な階層制内部の人物交代が緩慢なので、一定の大きなステレオタイプや行動型の引き継ぎができるというわけだ。父から子へ、高位聖職者から見習僧へ、百戦錬磨の将官から士官候補生へと一定の見方、やり方が教え継がれる。このような見方やり方はよく知られるところとなり、局外者である大衆によってもそれと弁別されるのである」(Walter Lippmann, *Public Opinion*, New York: Harcourt, Brace, and Company, 1922, p. 227. [掛川トモ子訳『世論(下)』岩波書店、一九八七年、五五-五六頁)。
- (110) Shirley, *Community Organizing*, *op. cit.*, pp. 71-72.
- (111) Sandel, *Democracy's Discontent*, *op. cit.*, p. 337. [前掲訳書、二七〇頁]
- (112) COPSのオーガナイザーであるクリスティーヌ・スティーブンス女史の言葉 [Sandel, *Democracy's Discontent*, *ibid.*, p. 337. 前掲訳書、二七〇頁に引用]。

- (113) Cortes, *Rebuilding Our Institutions*, *op. cit.*, p. 6.
- (114) Rogers, *Cold Anger*, *op. cit.*, p. 186.
- (115) *Ibid.*, p. 56.
- (116) Greider, *Who Will Tell the People*, *op. cit.*, p. 226. [前掲訳書「一九九頁」]
- (117) 筆者のインタビュー「二〇一二年三月二十五日」於・The Inn at Harvard (Cambridge: MA)。
- (118) Rogers, *Cold Anger*, *op. cit.*, p. 48.
- (119) *Ibid.*, p. 49.
- (120) Greider, *op. cit.*, p. 226. [前掲訳書「一九八頁」]
- (121) Michael Sandel, *Public Philosophy: Essays on Morality in Politics*, Cambridge, MA: Harvard University Press, 2005, pp. 25-26. [鬼澤友記『公共哲学——政治における道徳を考える』筑摩書房「二〇一一年」四四—四六頁]
- (122) *Ibid.*, p. 17. [前掲訳書「三四—三五頁」]
- (123) W. B. Brookover, C. Beady, P. Flood, J. Schwietzer, and J. Weisenbaker, *School Social Systems and Student Achievement: Schools Can Make a Difference*, New York: Praeger, 1979.
- (124) National Commission on Excellence in Education, *A Nation at Risk: The Imperative for Educational Reform*, Washington, DC: GPO, 1983. [橋爪貞雄訳「危機に立つ国家」橋爪貞雄『危機に立つ国家——日本教育への挑戦』黎明書房「一九八四年」二二—八三頁]。同報告書の政策的含意を広範な視座から分析した論文集としては、Philip G. Altbach, Gail P. Kelly, and Lois Weis, eds., *Excellence in Education: Perspectives on Policy and Practice*, Buffalo, NY: Prometheus Books, 1985 年 4 月 2 日。
- (125) Shirley, *Community Organizing*, *op. cit.*, p. 220.
- (126) Ernesto Cortés Jr., “Quality Education as a Civil Right,” in Teresa Perry, Robert P. Moses, Joan T. Wymne, Ernesto

- Cortés Jr., and Lisa Delpit, eds., *Quality Education as a Constitutional Right: Creating a Grassroots Movement to Transform Public Schools*, Boston, MA: Beacon Press, 2010, pp. 93-105.
- (127) Ernesto Cortés Jr., “METIS and the Metrics of Success,” in Richard F. Elmore, ed., *I Used to Think... And Now I Think...: Twenty Leading Educators Reflect on the Work of School Reform*, Cambridge, MA: Harvard Education Press, 2011, pp. 13-14.
- (128) Shirley, *Community Organizing*, op. cit.; Shirley, *Valley Interfaith*, op. cit. 46-47. Dennis Shirley, *Texas' Alliance Schools: Developing Strategies of Social Capitalization in Schools and Communities*, Madison, WI: Center on Organization and Restructuring of Schools, 1996 参考資料をたぐ。
- (129) Cortes, “Reweaving the Fabric,” op. cit., pp. 305-307.
- (130) Shirley, *Valley Interfaith*, op. cit.
- (131) リチャード・ローナーの言葉 (Kloppenber, *Reading Obama*, op. cit., p. 131 [前掲訳書「一六六頁」からの引用])。
- (132) Barack Obama, *Dreams from My Father: A Story of Race and Inheritance*, New York: Times Books, 1995, p. 330. [白倉三紀子・木内裕也訳『マイ・ドリーム——バラク・オバマ自伝』ダイヤモンド社、二〇〇七年、四〇七頁]
- (133) Shirley, *Valley Interfaith*, op. cit., p. 91.
- (134) Theda Skocpol, *Diminished Democracy: From Membership to Management in American Civic Life*, Norman, OK: University of Oklahoma Press, 2003. [拙訳『失われた民主主義——メンバーシップからマネージメントへ』慶應義塾大学出版会、二〇〇七年]
- (135) 拙稿「アドボカシー——アメリカ政治の一断面」『現代の図書館』第五一卷第三号、一六七—一七一頁。
- (136) Steven E. Schier, *By Invitation Only: The Rise of Exclusive Policies in the United States*, Pittsburgh, PA: The University of Pittsburgh Press, p. 10.

- (137) Warren, *Dry Bones Rattling*, *op. cit.*, p. 37.
- (138) Frances Fox Piven and Richard A. Cloward, "The Contemporary Relief Debate," in Fred Block, Richard A. Cloward, Barbara Ehrenreich, and Frances Fox Piven, *The Mean Season: The Attack on the Welfare State*. New York: Random House, 1987, pp. 45-108.
- (139) Gary Delgado, *Beyond the Politics of Place: New Directions in Community Organizing*. Berkeley, CA: Chardon Press, 1997, p. xi.
- (140) Davidson, *Race and Class in Texas Politics*, *op. cit.*, p. 253. IAF南西部支部は、二〇一四年、サンアントニオにおいて、「生活賃金」運動の具体的成果として生活賃金条例を可決させた。この点については、石神圭子「コミュニティ・オーガナイズメントとリベラリズムへの挑戦——産業地域財団による生活賃金運動をめぐる」『東京大学アメリカ太平洋研究』第一八号、二〇一八年、一一六一—一二二頁を参照。一二七のコミュニティ基盤の労働者センターの「生活賃金」運動を比較検討した、Janice Fine, *Workers Centers: Organizing Communities at the Edge of the Dream*. Ithaca, NY: Cornell University Press, 2006 年。COAの生活賃金への取り組みを考える上で極めて興味深い。
- (141) Warren, *Dry Bones Dry*, *op. cit.*, p. 30.
- (142) *Ibid.*, pp. 36-39.
- (143) Sandel, *Public Philosophy*, *op. cit.*, p. 41. [前掲訳書、六九頁]。サンデルは、「自由の公民的要素の最も有望な表現の一つは、IAFの仕事に見出せる」(Sandel, *Democracy's Discontent*, *op. cit.*, p. 336. [前掲訳書、一二〇頁])と述べ、「貧困者が多いコミュニティ住民に有効な政治活動の方法を提供するコミュニティを基盤とする組織のネットワークとしてのIAFを、一九六〇年代的な政治的活動主義の現代的再生」(Bruce Frohnen, "Sandel's Liberal Politics," in Anita L. Allen and Milton C. Regan, Jr., *Debating Democracy's Discontent: Essays on American Politics, Law, and Public Philosophy*. Oxford: Oxford University Press, 1998, p. 170.) として評価している。

- (144) Jeffrey M. Berry, Kent E. Porney, and Ken Thompson, *The Rebirth of Urban Democracy*, Washington DC: The Brookings Institution, 1993, pp. 46-47, 59. & Chapter 11.
- (145) Boyte, Booth, and Max, *Citizen Action and the New American Populism*, op. cit., pp. 27-28. [前掲訳書『アメリカン・ポピュリズム』五九一六二頁]
- (146) *Ibid.*, p. 67. [前掲訳書「一三三三頁」]
- (147) *Ibid.*, p. 24. [前掲訳書「五二頁」]
- (148) Jeffrey Stout, *Blessed Are the Organized: Grassroots Democracy in America*. Princeton, NJ: Princeton University Press, 2010, p. 231.
- (149) Sandel, *Democracy's Discontent*, op. cit., p. 337. [前掲訳書「二七一頁」]
- (150) Obama, *Dreams from My Father*, op. cit., p. 204. [前掲訳書『マイ・ドリーム』二四八頁]
- (151) Cortes, "Reweaving the Fabric," op. cit., p. 295.
- (152) Ernesto Cortes, Jr., "Habits of Democracy," *The Texas Observer*, November 17, 2006, p. 17.
- (153) Rogers, *Cold Anger*, op. cit., p. 188.
- (154) *Ibid.*, p. 194.
- (155) 「人民のための大学——人民を取り巻く世界が実際にどのように動いているのかを学ぶ民主主義の学校」(Greider, *Who Will Tell the People*, op. cit., p. 228. [前掲訳書『アメリカ民主主義の裏切り』三〇二頁]) が培う「社会的知識」を身に付けた「自分の頭で考える人」(徳永功『「自分の頭で考える人」を——ある近郊農村の社会教育』『思想』第四二二号、一九五九年七月、一一二—一七頁)をいう。チェンバースは、経験やその経験への熟考から得る学習を、計画やリサーチ、思考や反省と馴染む「アカデミックな知識」と対比して「社会的知識」と呼ぶ。そして、「より腹の底からの、より個人的な、より肉体的な」知識は「熟考」(mulling) からくることを述べている (Edward T.

Chambers, *The Body Trumps the Brain*, Chicago: ACTA Publications, 2008)。「社会的知識」は、父ブッシュ政権の遺骸から出てきた保守派が主張する「新しいシテイズンシップ」論が重視する、「専門」知識に優位に立つアメリカ人の「常識」＝「古い価値」(自制心、個人の責任、道徳的誠実さ)。参照: William A. Schambra, "By the People: The Old Values of the New Citizenship," *Policy Review*, No. 69, Summer 1994, pp. 32-38.)とは似て非なるものである。コルテスもチェンバースと同じように「社会的知識」と経験の関係を次のように説明している。「人々は、自らの経験から学ぶことを熟考することを奨励され、導かれ、助言されなければならない。ローカル・ナレッジが識別され、分節化(はつきり述べられる)されるのは、個人間や小集団内での構造化され、焦点を絞った会話を通してである。我々が社会的知識と呼ぶものが文脈化され、理解されるのはこの種の経験を通してである」(Cortés Jr., "METYS and the Metrics of Success," *op. cit.*, pp. 12-13.)。

(156) Robert Reich, *The Future of Success: Working and Living in the New Economy*, New York: Knopf, 2001. [清家篤訳『勝者の代償——ニューエコノミーの深淵と未来』東洋経済新報社、二〇〇二年]

(157) メイヤーは、冷戦終焉後の危機を「民主主義の道徳的危機」と呼び、政治的危機と区別した。先進諸国全体に広がる道徳的危機は、「政治以前 (pre-political) の領域」に存する未成熟な市民社会の「不満の政治」に起因し、「政治からの逃避、論争に対する食傷、主張をめぐる信念のなさ、論争の結果に対する不信、論争に加わる人々への蔑視などの要素によって規定される」と述べている。そしてメイヤーは、こうした憂鬱な道徳的危機の予測を覆すには、「市民社会の不完全な状態の(改善に向けた)コミットメントを示し、保護主義への傾斜を回避し、民族性や文化的つながりを超えた共通の大義を推進していく必要がある」と論じている。こうした歴史的な慧眼は、論文執筆から四半世紀の時空を超えて、現在のアメリカ社会を鋭く射抜いている(Charles S. Mair, "Democracy and Its Discontent," *Foreign Affairs*, July/August, 1994. 「民主主義の道徳的危機」『中央公論』一九九四年一〇月号)。

(158) Steven Levitsky and Daniel Ziblatt, *How Democracies Die*, Armonk, NY: Baron International, 2018. [濱野大道訳

「学びの共同体」としてのコミュニティ組織化

『民主主義の死に方』新潮社、二〇一八年